

五反田地区村道開設に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

あ じま ご たん だ い せき
阿 島 五 反 田 遺 跡 II

2013年3月

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

五反田地区村道開設に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

あ じま ご たん だ い せき
阿 島 五 反 田 遺 跡 II

2013年3月

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序 文

本書は、喬木村で村道開設と宅地造成の計画が立てられたため、平成23年5月から8月にわたり実施した阿島五反田遺跡第二次発掘調査をまとめたものです。この前年には同地区で阿島五反田遺跡第一次発掘調査が行われており、弥生時代中期の溝状遺構に土器集中地が出土したこと、弥生時代後期の合わせ土器棺や数多くの阿島式土器破片の出土があり、成果を上げることができました。

阿島五反田遺跡は、昭和10年に筒形土器が発見され大変珍しい土器として日本考古学会に発表され、「阿島式土器」と命名された経緯があります。その後、昭和24年には瓢箪形・双口土器の出土があり、昭和36年には下伊那教育会郷土調査部により試掘調査も実施されているところです。今回も「阿島式土器」の出土が大いに期待された調査となりました。

この調査の詳細については本書をお読みいただくとして、平成22年度の第一次発掘調査に引き続き、多量の阿島式土器片や古墳時代、平安時代の多量の土器出土に、阿島五反田遺跡の重要性をあらためて認識させられました。

最後になりましたが、本書の完成を見ずにご逝去された今村善興調査団長、今村団長の後を継ぎ無事本書を刊行していただいた市澤英利先生、小林正春先生をはじめ、調査にご協力いただいた皆さま、ご指導いただきました先生方、地元の皆さまに本書の発刊をもちまして心から感謝申し上げます。

今後、本書が発掘調査の研究活動に活用されることを願い、発刊の言葉といたします。

平成25年3月

喬木村教育委員会

教育長 原 三 雄

例 言

- 1 本報告書は、平成23年5月23日から8月5日までに喬木村教育委員会が実施した五反田地区村道開設に伴う、喬木村阿島五反田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、喬木村教育委員会が委嘱した特設の阿島五反田遺跡発掘調査団が行っている。調査団の組織は、団長は今村善興、調査員は市瀬辰春、大原成章、協力作業員は、池田一夫、湯沢俊夫、宮下文雄、宮下豊和、伊東信夫、中村裕夫、今村俱栄である。また、調査事務局は、教育長 原 三雄、事務局長 福澤博之、社会教育係 澤柳岳史である。
- 3 発掘調査終了後整理作業に入ったが、平成23年11月18日に今村調査団長が急逝されたため、整理作業を市澤英利と小林正春が受け継ぎ、報告書作成を行っている。
執筆担当 市澤：Ⅰ、Ⅱ-2、Ⅲ、Ⅳ-1・2、Ⅴ-1
小林：Ⅳ-3・4、Ⅴ-2
- 4 発掘調査での写真実測及び報告書作成に当たっての遺物実測は、(株)M2クリエイションに委託して実施している。
- 5 遺構番号は、22年度からの継続番号が付されて調査が進められたようであるが、欠番も多くあるなど統一的に整理しきれていない。
- 6 Ⅱ-1の「地形とその発達史」は、松島信幸氏が平成22年度喬木村教育委員会発刊の「五反田地区村道開設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 阿島五反田遺跡」に掲載した論考をもとに、再調査を実施し、再論考されたものである。
- 7 古墳・奈良・平安時代の遺物は、断面白：土師器、断面黒：須恵器、断面網：灰軸陶器として表示してある。また、内黒土器も内面網かけ表示している。
- 8 出土した遺物、写真・調査記録などの諸記録は、喬木村教育委員会が喬木村民俗資料館に保管している。

目 次

中表紙	
序 文	喬木村教育委員会 教育長 原 三雄 3
例 言	4
目 次	
I 発掘調査に至った経緯	8
II 遺跡周辺の環境	10
1 地形とその発達史	10
2 喬木村の遺跡について	11
III 23年度の発掘調査経過	19
1 調査区と調査方法	19
2 調査経過	19
IV 調査の結果	21
1 調査結果の概要と資料提示について	21
2 弥生時代	23
(1) 遺構	23
(2) 遺物	25
1) 土器	25
2) 石器	38
3 古墳時代	48
(1) 遺構	48
1) 住居址	48
(2) 遺構外遺物	50
4 奈良・平安時代	52
(1) 遺構	52
1) 住居址	52
(2) 遺構外遺物	58
1) A地区	58
2) B地区	59
3) C～F地区	
5 時期不詳	60
V まとめ	65
1 弥生時代中期前半の出土土器・石器について	65
2 古墳時代の遺構・遺物から	70
3 奈良・平安時代	71
写真図版	73
報告書抄録	87

挿図目次

第1図	調査地点位置図	9
2	阿島五反田遺跡の位置	10
3	喬木村天龍川沿いの地形地質区分および阿島五反田遺跡の位置づけ・防災基本図	12
4	阿島地籍の埋蔵文化財包蔵地図	15
5	遺構全体図	22
6	溝状遺構2・3実測図	24
7	壺類(条痕文を基調とするもの)	25
8	" (")	26
9	" (沈線文・縄文・刺突文等を主とするもの)	28
10	" (")	29
11	" (赤彩されるもの)	30
12	" (捺描文を主とするもの)	31
13	小型壺・無頸壺・厚口鉢・不明・中期後半及び後期	32
14	壺類(胴部)	33
15	甕類(条痕文の幅・深さがほぼ均一で密に施文するパターン)	34
16	" (")	35
17	" (条痕文の幅・深さが不均・傾向で粗に施文するパターン)	36
18	" (")	37
19	" (短線文が施文される、条痕文を縦施文する、無文パターン)	39
20	底部	40
21	石器(耕起具)	41
22	" (")	42
23	" (")	43
24	" (")	44
25	" (耕起具・收穫具)	45
26	" (收穫具・工具)	46
27	古墳・奈良・平安時代遺構図	47
28	19号住居址出土遺物	49
29	23号住居址(1~3)遺構外出土遺物(4~11)	51
30	16号住居址出土遺物(1)	61
31	16号住居址出土遺物(2)	62
32	18号住居址(1~12)20号住居址(13~25)出土遺物	63
33	22号住居址(1~10)遺構外(11~27)出土遺物	64

写真図版目次

図版 1	遺跡の遠望・近景	74
図版 2	溝状遺構 2 と 3	75
図版 3	溝状遺構 1 と 4	76
図版 4	19号・16号・20号カマド	77
図版 5	22号カマド・ピット列・発掘風景	78
図版 6	弥生土器(甗)	79
図版 7	弥生土器(壺)	80
図版 8	弥生土器(壺)	81
図版 9	弥生土器(甗)	82
図版 10	弥生土器(甗)	83
図版 11	弥生土器(甗)	84
図版 12	弥生土器(耕起具)	85
図版 13	弥生土器(收穫具・工具・狩猟具)	86

表目次

表 1	喬木村埋蔵文化財包蔵地一覧	16
表 2	喬木村古墳一覧	17

I 発掘調査に至った経過 (第1図)

521-1番地で井戸掘り時に出土した土器が、喬木第一小学校に保管されていた。この土器が大沢和夫氏の目にとまり、当時全国的な情報誌であった『考古学』（東京考古学会）に、昭和13年「阿島式土器」として報告され、阿島五反田遺跡は全国的に知られることとなった。その後、大沢氏は同様の資料の発見に努め、537-1番地出土の土器を昭和25年に『信濃』に報告された。これらの土器群は、中部高地における縄文時代から弥生時代への移り変わりをとらえる上で重要な資料され、『日本考古学講座4』や『信濃考古総覧 下巻』等に取り上げられたりした。しかし、発掘調査は行われることなく過ぎてきた。

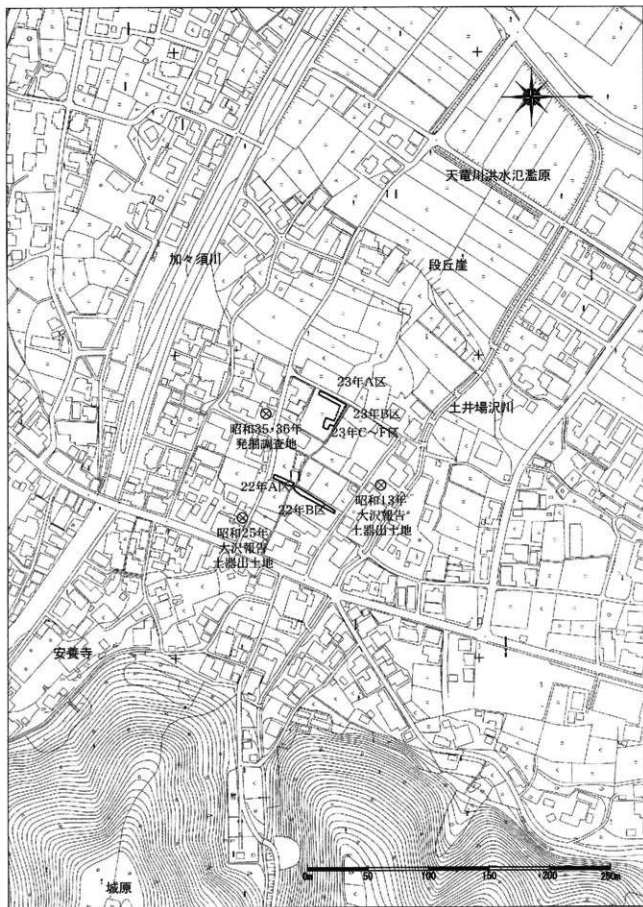
昭和35、36年になって、下伊那教育会歴史調査部が549-1番地の発掘調査を行った。表土下180cmほどから3個体の完形壺形土器をはじめ甕形土器や石器類が得られた。これらの資料によって、阿島式土器の型式内容や中部高地における弥生文化への移行についての研究が進展し、阿島五反田遺跡や阿島式土器の重要性が再認識された。

昭和40年代以降、高度経済成長とともに大規模開発事業が盛んになり、発掘調査も大規模に行われるようになったが、阿島式土器の出土は断片的であった。そのためもあって、阿島五反田遺跡への関心は常に高く持たれてきたが、発掘調査の機会はなく経過してきた。

近年になって、喬木村は阿島五反田遺跡内で村道の開設と住宅造成を計画した。本遺跡は前述したように全国的に知られた遺跡であり、その保護措置は慎重に検討された。平成22年3月に喬木村教育委員会によって試掘調査が行われ、地表下50cm辺りから中世陶器片・灰釉陶器片・古墳時代の土器片が数多く出土した。この結果をもとに長野県教育委員会を交えた保護協議により、最低道路建設予定地内は発掘調査することになり、喬木村教育委員会は、平成22年と23年の2ヶ年にわたって発掘調査を実施するように計画した。

平成22年度は、528-1番地と547-1番地で道路建設予定地の発掘調査を行い、整理作業を経て『五反田地区村道開設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 阿島五反田遺跡』が、平成23年(2011年)3月に刊行された。調査地点からは、弥生時代中期(主として阿島式土器を伴う)遺構と遺物、同後期の土器棺、古墳時代・平安時代の住居址や遺物が出土した。中でも、阿島式土器とされる甕・甕類や同時期のものに位置づけられる石器が数多くあり、伊那谷及び東日本の弥生文化の定着を考える上で欠かせない資料が提供された。

平成23年度は、前年度の調査成果をふまえて、550-1番地の西側と北側の道路建設予定地をI字状に発掘調査を実施した。



第1図 調査地点位置図

II 遺跡周辺の環境

1 地形とその発達史 (第2図・第3図)

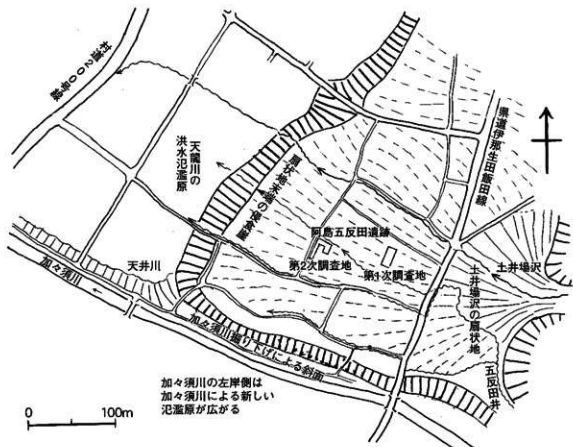
(1) 調査地点の位置

調査地点は、村の北部、加々須川右岸、天龍川に面する土井場扇状地面上にあたる(第2図)。県道伊那生田飯田線(標高418.7m)より天龍川に向かって60m入った地点(標高417m)である。扇状地表面は、調査地点から天龍川に向かって、さらに180m連続している。扇状地の末端は、比高2m~3m余の侵食崖が、天龍川に並行するように形成されている。侵食崖下は天龍川の洪水氾濫原で天龍川に向かって200m以上先まで広がっている。

(2) 調査地点周辺での地形発達

① 地質観察

調査地点での阿島式土器を包含する地層は、表層の耕作土直下の土層より土器片の散在が認められる。礫混じりの砂層を主とし、人的な攪乱や表層流による攪乱を受けている。堆積環境や遺物を包含する産状が乱れている。第2回の発掘調査でも、同様な堆積環境であった。



第2図 阿島五反田遺跡の位置

遺跡は土井場沢扇状地が加々須川と天龍川との侵食によってできた扇状地侵食段丘上に立地しており、遺物は扇状地砂礫層の上面に集中または散在している

② 第2次調査溝での観察

第2次調査では表層から2m余まで掘り下げた。下位には礫が多く混入する粗い砂層があり、阿島式土器が包まれていた。住居址は確認されなかったが、阿島期に相当する堆積層と見られた。一方、トレンチ南側には礫まじりの暗色土があり、阿島期より新しい古墳時代とそれ以後の遺構が含まれていた。以上から考察すると、土井場扇状地が形成された後のやや安定した扇状地を利用して阿島期の生活面があったと考えられる。

現在は、上井場から村全域に家屋・道路・山畑などの環境は車社会に適応して整備されている。ところが、約2000年前の阿島式土器時代の様子はどうだったか。1次・2次発掘から学んだのは、当時の地表面が微妙な凹凸を示し、迷路のような小道と住居、今の通念では想像できにくい土地利用などである。地面の形状や水利用などは現在の通念とは異なる。さらに面的な調査が待たれる。

③ 低位段丘面を掘り込み加々須川

調査地点から南へ60mの位置に加々須川が流れている。加々須川は、土井場扇状地を4m～4.5mほど掘り込んでいる。現在の加々須川は、兩岸をコンクリート堤で固められている。加々須川に面して、巾50m前後の斜面が護岸堤まで延びている。斜面の比高は、2m～2.5mである。斜面には、家々が立ち並び、加々須川によって土井場扇状地が侵食された部分にあたる。この部分での2m余の掘り込みは、扇状地形成後の加々須川による侵食である。

④ 洪水氾濫面で天井川になる加々須川

加々須川は、土井場扇状地の下流端より天龍川までの間が天井川になっている。村道200号線を行って加々須川を越えるとき、水山地帯から約5mの上がり下りをするので天井川が実感できる。壬生沢川を越えるときにも同様である。低位段丘面の下は、天龍川の氾濫源である。その氾濫原へ、加々須川から供給される砂礫が堆積を繰り返してできてきたのが天井川である。天井川の形成は、土井場扇状地を掘り下げてきた過程で形成されたといえる。

⑤ 天井川を築いてきた稲作人

天井川の形成には、扇状地上で生活していた弥生時代の人達から現在に至る稲作農民が関係する。天井川は、天龍川洪水氾濫原で水田耕作をしてきた人達が営々と築き上げてきたもので、人のかかわりが極めて大きいといえよう。堅固な護岸堤で固められている現在の姿は、現在の産物であり、50年前の「三六災害」後の復興による。さらに以前は、加々須川などで発生する度々の洪水で破堤して砂礫が水田地帯へ流れ出た。破堤すれば、その都度、人力をもって氾濫した砂礫を天井川へ積み上げてきた。こうした結果が、天井川の姿である。

2 喬木村の遺跡について (第4図・表1・表2)

喬木村は天龍川左岸に位置し、右岸からは懸崖状の段丘地形を望むことができる。本遺跡は、最低位段丘面に立地する遺跡であるが、喬木村の最低位は天龍川洪水氾濫原になり、その上に低位段丘面、さらに、その上に中位段丘面が形成されている。その東は伊那山脈に続く山間地で、大島・氏乘といった集落がある。また、飯山市上久堅に通ずる南は、盆地状になっていて富田地帯がある。

喬木村には、埋蔵文化財包蔵地として57遺跡と52基の古墳(信仰塚等も含まれる)が周知されてい

る。それらの立地は、地形環境によって大きく4つに区分できる。

一つ目は、最低位段丘面上及び天龍川の支流である加々須川・小川川の流域に立地する遺跡群で、阿島北遺跡・土井場遺跡・阿島五反田遺跡・阿島南遺跡・里原遺跡・馬場平遺跡・小川川尻遺跡・郭遺跡・上耕地遺跡・小川川南遺跡・郭1～5古墳・里原1～4号古墳等がある。

二つ目は、最低位段丘面から70～80mほど上がった中位段丘面上に展開する遺跡群で、城原遺跡・犇牛原遺跡群（城本屋・中原・十万山・南原遺跡として把握されている）・上平遺跡・伊久間原遺跡・伊久間原下原遺跡・城原1・2号古墳・中原1・2号古墳・奴山古墳群等がある。

以上の遺跡や古墳は、天龍川に而して立地している。

三つ目は、富田地籍に立地する遺跡群で、地神遺跡・喬木第二小学校遺跡・下塚遺跡・市場遺跡・市場古墳・地の神古墳・小平1～3号古墳等がある。

四つ目は、山間部に立地する遺跡群で、桃添地籍の茶白山遺跡、大和知地籍の広町遺跡・元屋敷遺跡、大島地籍の梨の木平遺跡、氏乗地籍の中反遺跡等がある。

次に、各種開発等に伴って発掘調査された遺跡の調査成果から、考古学的に明らかにされてきている喬木村の原始古代を概観してみたい。

旧石器時代の遺構遺物は、最終末から縄文時代草創期にかけての有舌尖頭器が伊久間原遺跡から採集されている程度で現状皆無に等しい。

土器の使用がはじまり、狩猟採集による生産活動を主とする縄文時代の遺構遺物は、多くの遺跡から出土している。現状での喬木村最古の集落は、約8000年前の早期で、伊久間原遺跡と伊久間原下原遺跡で発見されている。さらに、伊久間原下原遺跡では約6000年前の前期の住居址が2軒発見されていて、伊久間遺跡一帯へは人々の足の踏み入れが早かったことが知れる。約5000年～4000年前の中期になると最低位段丘面に立地する郭遺跡、中位段丘面に立地する犇牛原遺跡群や伊久間原遺跡、富田地籍の地神遺跡から集落址が発見されている。特に、犇牛原城本屋遺跡や伊久間原遺跡では、住居址が複雑に切り合い、大量の土器や石器が出土しており、継続的で大きな規模の集落が営まれていたことがわかっていく。約3500年前の後期になると中期のような状況は無くなるが、郭遺跡・犇牛原城本屋遺跡・伊久間遺跡から遺構・遺物が発見されている。そして、約2700年前の晩期の遺構遺物の出土は、非常に少なくなる。

水田稲作を生業活動の主とする弥生時代になると、その遺構遺物が最低位段丘面を中心に発見されている。郭遺跡からは、弥生文化波及を示す前期の遠賀川系土器が、阿島五反田遺跡や犇牛原遺跡十万山地区からは、中期前半の遺構遺物が発見されている。中期後半になると伊久間原遺跡から壺形土器が出土しているが出土例は少ない。約1900年前の後期になると、犇牛原遺跡群、伊久間原遺跡、地神遺跡から住居址や方形周溝墓が多数発見されており、弥生人が中位段丘面の開発に尽力したことがわかる。また、犇牛原遺跡十万山地籍から出土した銅鏡、地神遺跡から出土した遠江を中心とする菊川式土器は、飯田市下伊那地方での出土例がほとんどないものであるとともに、他地域との交流の一端を教えてくれている。

数多くの古墳が築造される古墳時代になると、加々須川左岸に天龍川左岸で唯一の前方後円墳、郭第一号古墳が築造され、付近には複数の円墳も築造されている。また、小川川の右岸にも里原古墳群をはじめとする古墳群が形成され、犇牛原中原遺跡や伊久間原遺跡の東斜面にも築造されている。これらの古墳には、埴輪、銅鏡、馬具などが副葬されており、竜東での古墳時代の中心的地域であっ

たと考えられる。古墳時代の人びとの集落址は、阿島五反田遺跡、地神遺跡、伊久間原遺跡から発見されていて、中でも、伊久間原遺跡からは、多数の住居址が発見され、大きな集落があったことが判明している。

奈良・平安時代になると、住居址が阿島五反田遺跡、梶牛原城本屋遺跡、伊久間原遺跡、地神遺跡で発見されているものの、大きな集落としての発見例はない。しかし、阿島五反田遺跡一帯には、出土遺物の量からみて大きな集落址が存在した可能性が大きい。

中世から近世では、城原城跡（阿島）・知久氏館跡（阿島）・松下城跡（小川）茶臼山砦（加々須）・氏乗城跡（氏乗）・伊久間城跡（伊久間原）・富田城跡（富田）の城館跡が知られ、曲輪や空堀などが確認されている。城原城跡は、一部が発掘調査され、配石列とその一帯から銅鏡と陶器が出土している。また、上平遺跡・伊久間原遺跡・地神遺跡などからは建物址が検出されているし、調査された各遺跡からは該期の陶磁器類が少量ではあるが出土しており、人々の営みを知る上での材料を提供してくれている。このほか、発掘調査された上平の諸原一三塚は旗塚と考えられ、里原遺跡からは水田跡が見つかっているが、時期の決め手となる遺物を欠いている。

喬木村教育委員会	1971	『梶牛原』
同	1973	『梶牛原南原遺跡』
同	1977	『梶牛原城本屋』
同	1978	『伊久間原』
同	1979	『梶牛原十万山地区』
同	1980	『伊久間原遺跡Ⅱ』
同	1981	『地神（じのかみ）遺跡』
同	1984	『里原遺跡水田跡』
同	1991	『伊久間原遺跡 下原』
同	1992	『諸原一三塚』
同	1991	『阿島城原城跡』
同	1992	『上平遺跡』
同	1993	『阿島郭遺跡』
同	1994	『梶牛原中原遺跡北東地区』
同	1995	『伊久間原遺跡公園広場』
同	1998	『梶牛原運動公園調査報告書』
同	2001	『伊久間原遺跡』
同	2003	『伊久間原遺跡Ⅳ』
同	2011	『阿島五反田遺跡』



第4図 阿島地籍の埋蔵文化財包蔵地図

表1 喬木村埋蔵文化財包蔵地一覧

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代				弥生時代		古墳時代		奈良	平安時代	中世	近世	調査年度、遺構・遺物、備考
				早期	前期	中期	後期	前期	後期	土器	石					
1	阿島北遺跡	阿島 北					○	○	○	○		○			遺跡の中心地不詳、詳細分布調査必要	
2	土井塚*	* *													久保田宅のこと?	
3	阿島五反田	* *						●	●	○		○			昭和35年、阿島式土器・灰埴、平成22年発掘	
4	おくまんの	* *					○	○							遺跡地不詳、一確認必要	
5	城原城跡	* 城原												○	柵の堀、版瓦	
6	花立 遺跡	* 町					○	○	○	○					遺跡地不詳	
7	阿島南*	* 南							○	○					遺跡跡目不詳、分布調査必要	
8	里原*	* 里原					○	○	○	○			○	○	昭和53年水田跡、下段の範囲再調査必要	
9	城原*	* 城原					○	○					○		昭和50年墓地公園調査	
10	藤畑*	* *					○									
11	郭*	* 郭					○	●	●	○	○				●	昭和52年調査、平成3年調査、縄文中期住7・同後期住7等
12	知久氏館跡	* *													●	城板、池跡、茶室燻月庵
13	西の宮遺跡	* *					○			○	墳				○	
14	駒牛原*	* 駒牛原					●	○		●						昭和45年調査、縄文中・方形周溝墓 昭和52年十方山・平成8年運動公園西整理 昭和51調査、縄中住45・縄後住4・弥生住2・平安住1、土坑
15	城本屋*	* 駒牛原・城本屋					●	●		●		○	○			平成9年調査、縄文時代住15・弥生時代後期住・方形周溝墓4・中世式大形壘形土器
16	泉牛塚中塚*	* 中塚					●	○								昭和47年調査縄文晩期住1 方形壘遺跡
17	* 南原	* 南原						○		○						
18	大久保*	* 大久保					○			○						大形石櫛
19	寺の前*	* 寺の前					○									遺物出土地不詳
20	馬場平*	* 小川馬場平					●	○	○	○				○		旧中学校敷地弥生時代住 詳細調査必要
21	興平塚中*	* 南平								○						瓦塚上、弥生時代後期壘形土器
22	田本平*	* 田本平					○			○						遺物出土地不詳
23	上耕地	* 上耕地					○			○					●	小川の堤北耳栓、平畑弥生壘形土器完形・古銭
24	小川川南	* 川南					○			○					○	區泉寺付近
25	さぎのす畑	* *						○								
26	小川の堀遺跡	* 上平						●		○					●	縄文中期住・松下城跡下中世陶器
27	* 上平	* *					○	○		○					○	平成4年調査、縄文中期住8・弥生晩期住4・方形周溝墓1・中世建物址2・配石遺構1
28	さがり遺跡	* *													●	昭和56年調査、道路沿いに4基の壘が並ぶ。(小川池)
29	小川上の原	* 上の原					○	○								遺物出土地不詳
30	松下城跡	* *														主郭・二部・空堀・土塀・壘壁・壘土壘
31	舘原十三塚	* *												○		平成4年調査、10基の内4基破壊、5~10号墳丘残存
32	ショウバ塚	* 味津					○									遺物出土地不詳
33	茶白山遺跡	* *					○									
34	藪の木平*	* 大島								○						磨製石鏃出土
35	中反*	* 氏兼中反					○									石鏃出土
36	氏兼城跡	* 城山												○		主郭・二郭・土塀等
37	小川川原遺跡	* 伊久間小川原					○									表掘資料、位置不詳
38	寺下*	* 伊久間												○		衣裾米竈、平安坪出土(遺跡名仮称)
39	マトバ*	* マトバ								○						
40	伊久間原*	* 伊久間原	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	昭和27・29・52・53平7・10・11調査、縄文早期住8・同中期70・弥生時代後期住3・古墳時代住20・平安時代住2・遺物出土
41	伊久間下原	* *					●	○	○	○					○	昭和53・平2・8・11調査、縄文早期住5・同前期住15・同中期住13・同後期住6・弥生時代後期墓61か

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代							中世	近世	調査年度、遺構・遺物、備考		
				草	早	前	中	後	晩	前				中	後
42	伊久間大原 遺跡	伊久間大原		○	●										昭和53年調査縄文早期・中期住居址
43	伊久間城跡	伊久間原													段丘先端、郭・土塁・櫓曲輪
44	伊久間水防土塁	*													近世水防土塁、(一部城跡土塁?)
45	小平 遺跡	富田				○				○	○				
46	馬場平 *	*				○				○	○				
47	地の神 *	*				●				●	○	○	○	○	昭和55年調査、縄文中期住居5・弥生後期住居9・古墳時代住居3・平安時代住居2・中世住居1、建物址1
48	富田京跡 *	ナマズ												●	近世陶器・窯具多量出土、窯位置不詳
49	第二小学校 校庭 *	*				○				○	○				
50	下塚 遺跡 *	*				○	○			○	○				
51	市場 *	*				○				○	○				
52	塩田 *	*				○				○					
53	日向 *	*				○									
54	上富田 *	*				○									
55	富田 城跡 *	*										○			主郭以外不詳
56	広町 遺跡	大和地				○									打石磨出土
57	元尾敷 *	*				○									*

表2 喬木村古墳一覽

No.	村番号	登録番号	古墳名	所在地	立地	墳丘現存	石室現存	遺構・遺物	備考
1	102		町 古墳	阿島町	低位段丘	円・楕圓	大石発見	須恵器	昭和42年新発見
2	8	3390	町弁天 *	町 花立1009	低位段丘産下	円 *		土師器・須恵器	
3	9	3391	杉立 *	南 杉立1835	* *	円・○		不詳	石造物あり
4	16	3386	宮沢 *	北 宮沢3907	* 中腹	円・○			
5	17	3385	熊野 *	* 熊野3921	* *	円・○		直刀1・土師器、須恵器	
6	22	3384	城原1号 *	城原4241	中位段丘	円・楕圓		直刀・槍先・土師器	
7	21		城原2号 *	* 3907	*	円・○		直刀1・土師器	昭和45年発掘調査
8	23	3368	郭 1号 *	阿島郷 3258	低位段丘	前方後円・○	横穴石室	出土遺物不詳	遺跡地区唯一前方後円墳
9	24	3869	* 2号 *	* * 3258	*	円・楕圓		形象・円筒埴輪・直刀・刀子・金環・鉄鍔・鏡・板・槍具・雲珠・青紫・土師器・須恵器	旧学校校庭西隅
10	30	3370	* 3号 *	* * 3601-1	*	円・○			
11	31	3371	* 4号 *	* * 3611	*	円・楕圓			
12	103		* 5号 *	* *	中位段丘中腹	円・楕圓		鐘形円筒埴輪・円筒埴輪・須恵器	村道改修中発見
13	35	3387	中原1号 *	猪牛原中原3144	中位段丘先端	円・楕圓		直刀・須恵器	
14	36	3388	* 2号 *	* 3148	* *	円・○		円筒埴輪・直刀・刀子・須恵器	別名藤塚
15	40	3377	大久保1号 *	* 大久保2953	低位段丘	円・楕圓		須恵器	
16	41	3378	* 2号 *	* * 2953	*	円・楕圓			
17	37	3389	狐塚 *	唐沢1679-4	*	円・楕圓			
18	10	3381	里原1号 *	阿島里原1226	低位段丘	円・	横穴	仿製四神瓦甕・直刀・磁石・碧玉・トシ不玉・須恵器	
19	11	3382	* 2号 *	* 1226	*	円・○			
20	12	3383	* 3号 *	* 1469-1	*	円・楕圓		円筒埴輪・直刀	
21	13	3384	* 4号 *	* 1469-1	*	円・楕圓		形象埴輪・土師器・須恵器	
22	14	3400	山伏塚 *	馬場平5846	*	円・楕圓		土師器	

No.	村番号	登録番号	古墳名	所在地	立地	墳丘現存	石室現存	遺構・遺物	備考
23	15	3401	宮の崩古墳	馬場平5825-2	低位段丘	円	横		
24	50	3402	小仏林	西平5941-2	*	円・○		剣・刀子・土師器	
25	51	3403	家の上	* 6086	*	円・楕圓			
26	52	3404	正覚塚	上平7651	上位段丘	円・○		土師器	
27	53	3405	塚跡1号	川南7278-2	下位段丘	円・○		土師器片・石室露出	
28			* 2号	* 7278	*	円・○		土師器片	
29	99	3397	七人塚	サギノス7374	中位段丘	円			
30	79	3406	藤塚	大原7584	上位段丘	円・○			
31	76	3415	奴山1号	大原17302-2	*	円・○		土師器・須恵器片	
32	*	3416	* 2号	* 17326	*	円・○		土師器片	
33	*	3417	* 3号	* 17326	*	円・○			
34	*	3418	* 4号	* 17326	*	円・○		直刀・鉄鏃	
35	*	3419	* 5号	* 17326	*	円・○			
36	*	3420	* 6号	* 17326	*	円・○			
37	77	3421	赤坂	伊久間原16988	中位段丘	円・楕圓		管玉	
38	59			伊久間	下位段丘	円・楕圓		直刀・碗形・高坏形	昭和28新発見
39	60	3422	狐島	* 16593	*	円・○			
40	61	3423	井ノ上	* 16473	*	円・○		甲・鉄鏃・轡・金剛・切子玉	
41	62	3413	城の上	* 16807	上位段丘	円・○			
42	67	3424	船渡上	* 16144-1	下位段丘	円・楕圓		土師器片	
43	82	3439	丸山	富田12878	上位段丘	円・楕圓		直刀	
44	83	3430	小平1号	* 12949	*	円・○			
45	84	3431	小平2号	富田12949	上位段丘	円・○		直刀・轡・土師器	
46	85	3432	* 3号	* *	*	円・○		土師器	
47	87	3428	馬場	* 13131	*	円・○		直刀・土師器・須恵器	
48	89	3426	兼の神	* 12315	*	円・○		鉄鏃・土師器・須恵器	
49	94	3436	市場	* 13673	*	円・○		土師器・須恵器	
50	105		七人塚	大和地	*	円			
51	106		山伏塚	*	*	円			
52	45		加々須経塚	加々須	山腹	円			

Ⅲ 23年度の発掘調査経過

1 調査区と調査方法

調査対象地である550-1番地の西端と北端が道路建設予定地に計画されていることから、予定地にL字状にトレンチを設定した。西端トレンチをA地区、北端トレンチをB地区とし、それぞれのトレンチを2m間隔で、A地区は北からA1・A2……A10まで、B地区は西からB1・B2……B10までにグリッド分けした。

調査の重点は、前年度の調査結果や遺跡の特性をふまえて、弥生時代中期阿島式土器期の遺構や遺物の検出とされた。掘り下げは、耕作土の重機での排土後は、人力によって掘り下げながら遺構検出することとした。掘り下げと共に前年度の調査結果から、平安時代、古墳時代、弥生時代後期等の遺構・遺物が検出されると予想でき、その場合は遺構等の部分を残しながら下層を掘り下げ、弥生時代中期の包含層や遺構・遺物の状況の把握を優先し、阿島式土器期にかかわる調査時間が確保できるように進めることとした。また、阿島式土器期の住居址等の遺構が検出された場合は、調査区の拡張も視野にいれて調査に臨み、B区東端で阿島式土器を多く包含する溝状遺構が検出されたことから調査区を拡張し、C・D・E・F区として調査された。

2 調査経過

発掘調査期間中に発行された「五反田便り」No.1～7及び、調査日誌風に記録された野帳をもとに、調査経過を追うこととする。

5月16日に重機での掘削と基準点測量を行い、23日に調査開始式を行った。A区の壁面削りから本格的に発掘調査を開始し、上部水田層と下部水田層からなるI層、黒褐色土のII層が把握された。下部水田層及び黒褐色土からは瀬戸物、灰軸陶器、土師器が出土した。さらに、B区の掘り下げを重機で行い、以後、調査方針に基づいてA区、B区の掘り下げ作業に入った。

6月6日までの調査状況：「五反田便りNo.1」より

A区では、表土下100cm程から平安時代の土師器、須恵器が数多く出土してきているが、落ち込みや焼土は見発見されていない。B区は、表土下100～140cmあたりの2箇所から阿島式土器がまとも出土するとともに、古墳時代、平安時代の住居址らしき遺構も認められた。

6月10日までの調査状況：「五反田便りNo.2」より

A区の表土下140～160cm程からカマドを確認、竈には土師器の甕や皿、須恵器が並んで残された状況にあった。また、A区、B区全体から丹塗土器や瓢箪形土器、三河系土器が出土し、中でも、A区の北端は表上下200cmほど掘り下げられ、阿島式土器が200点以上出土した。

6月20日までの調査状況：「五反田便りNo.3」より

A区東側を拡張、16号住居址の竈が明確になり、数軒の平安時代の住居址の存在が推定された。A区南端の160cm下辺りから、平石、立石、焼土をもつ穴があり、古墳時代の甕・高杯・甌などがまと

まって出土し、古墳時代の祭祀跡らしいととらえた。阿島式土器は、A1～5及びB区1～9から出土している。

7月4日までの調査状況：「五反田便りNo.4」より

古墳時代・平安時代の遺構が確認されてきたが、16号住居址で掘り込みが確認できている。阿島式土器が数多く出土しているB区東端では、大形の土器片を含み円形状で東側へ広がると思われる幅1mほどの溝の存在がわかってきた。

7月11日までの調査状況：「五反田便りNo.5」より

古墳時代・平安時代の遺構群の調査がほぼ終了し、下層の掘り下げを実施。B区東端の溝に接して黄砂質上の台地が検出され、一帯の拡張を要望することとする。A区とB区の交差地一帯では、160～210cmほどに黄砂土が見られ、上面及び砂土中から長頸甗草形土器、赤彩の壺形土器、甕形土器の大きな破片が出土している。

7月19日までの調査状況：「五反田便りNo.6」より

B区東端一帯を拡張して溝状遺構の調査を進め、幅2m以上深さ1mほどの幅広の溝になることが確認され、22年度調査のA区の溝とかかわりも考えられた。一帯からは阿島式土器片や土器が出土している。

8月1日までの調査状況：「五反田便りNo.7」より

阿島式土器は、A1～5、B1～10、C・D・E・F区に集中する。溝は、溝状遺構1・2・3としてとえられる。中でも、溝状遺構3は、台地の縁を斜めに削って幅広の平坦な窪地を造ったと考えられ、平坦面からは、大形の土器片や土器がまとめて出土していて特殊な遺構と考えられた。

以後、発掘調査は8月5日まで行われ、A区とB区の交差地の溝1、東端の溝3の底面の掘り下げなどを行って現場作業を終了している。実質の現場作業日は43日間であった。

発掘作業終了後、整理作業を開始し、図面整理、遺物の注記、接合、実測委託遺物の運び出し、拓本取り等を行っていたが、11月に今村善興団長が急逝され整理作業が中断してしまった。平成24年度になって、市澤と小林が整理作業を引き継いだ。

IV 調査の結果

1 調査結果の概要と資料提示について (第5図)

発掘作業終了後の23年8月10日付けで今村団長が作成した「喬木村「阿烏五反田遺跡」発掘調査報告」に記された遺構数は以下のようである。

検出された主な遺構

- (1) 平安時代 住居址・カマド遺構 (14・16・18・20・22号) 5軒
- (2) 古墳時代 住居址・祭祀址等 (12・13・19・21・23号) 5軒
- (3) 弥生時代中期 溝状遺構1～4 溝状遺構上のテラス状遺構2

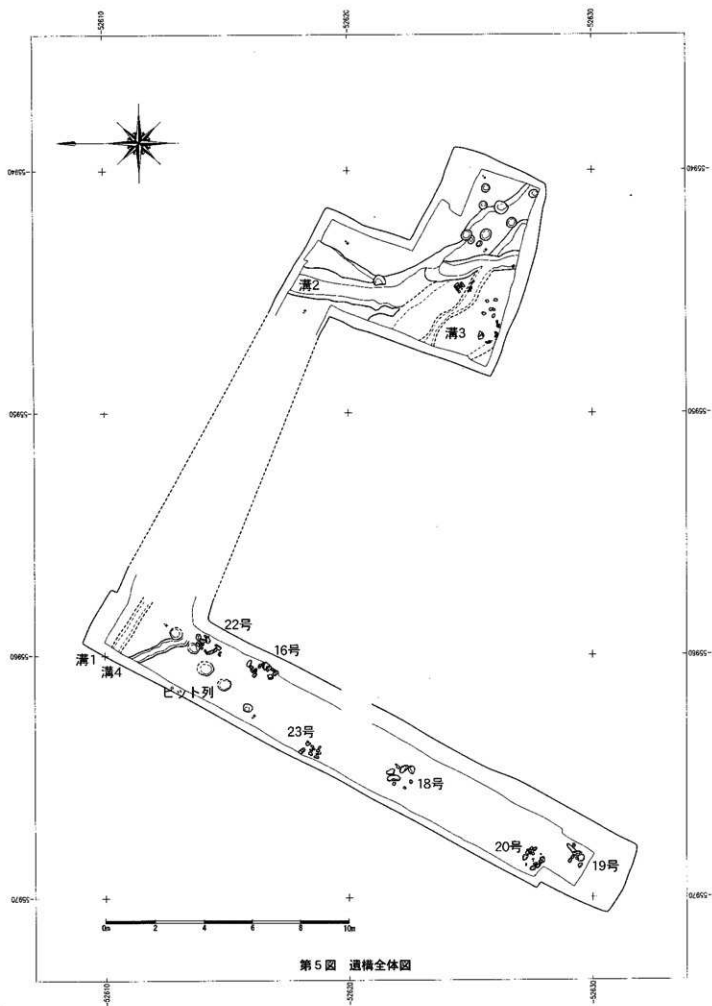
一方、野帳や現場で記入されたグリッド図へのメモ、「五反田便り」には、調査の進行と共に認識して番号を付した遺構が記されている。しかし、個々の遺構図が残されていない、写真記録に撮影内容が記されていない、遺構ごとの出土遺物も明確に区分けされていないといったことがあり、前述の報告とおりに遺構及び出土遺物を把握することはできなかった。

そうした状況の中で、写真実測図、写真記録、諸記録などを重ねあわせて、遺構やそこからの出土遺物についてすりあわせを行ってみた。

弥生時代とされた複数の溝は、完掘状態での写真実測図化ではなく、最終的な溝の形態は不明であった。そこで、写真記録をもとに整理担当者として推定した結果を提示した。また、出土遺物の注記に統一性がなく曖昧な点が見られたことから、調査区内から出土した遺物群とし、型式学的な見方や先行研究を参考して提示することとした。

古墳時代では住居址と祭祀址とした遺構が合わせて5軒、平安時代では住居址が5軒と認識されている。しかし、実測図は写真実測図のみであったため、その実測図と写真で記録されているカマドに関して提示するようにした。遺物に関しては、写真記録と遺物の注記から、カマド出土遺物を整理担当者として把握し提示することとした。

遺構番号は調査時点で種類に関係なく遺構らしきと認識すると番号を付していったようで、大きな番号になっているが、その数だけ遺構が把握されているということではない。調査終了後に遺構番号を整理する予定であったと思われるが、なされていなかったので調査時に付けられた遺構番号をそのままに記述するようにした。



2 弥生時代

(1) 遺構

◎ 溝状遺構 2 と 3 (第 6 図、図版 2)

溝状遺構 2 と溝状遺構 3 (以下溝 2 ないし溝 3 と記述) は、B 地区の東端で検出されている。まず、溝 2 が黒色土の落ち込みとして検出されたことから、調査区の拡張 (C・D・E・F 地区) がなされた。

溝 2 は、幅 1～1.3m で、検出面から 10～30cm の深さで、南北方向に 4.6m ほど延びる溝と確認された。覆土は、小石混じりの黒色土の上のようであることが写真記録から伺えた。南端で溝 3 と交わるが、切り合いの前後関係は不明である。溝 2 からの出土として注記されている遺物は少ない。

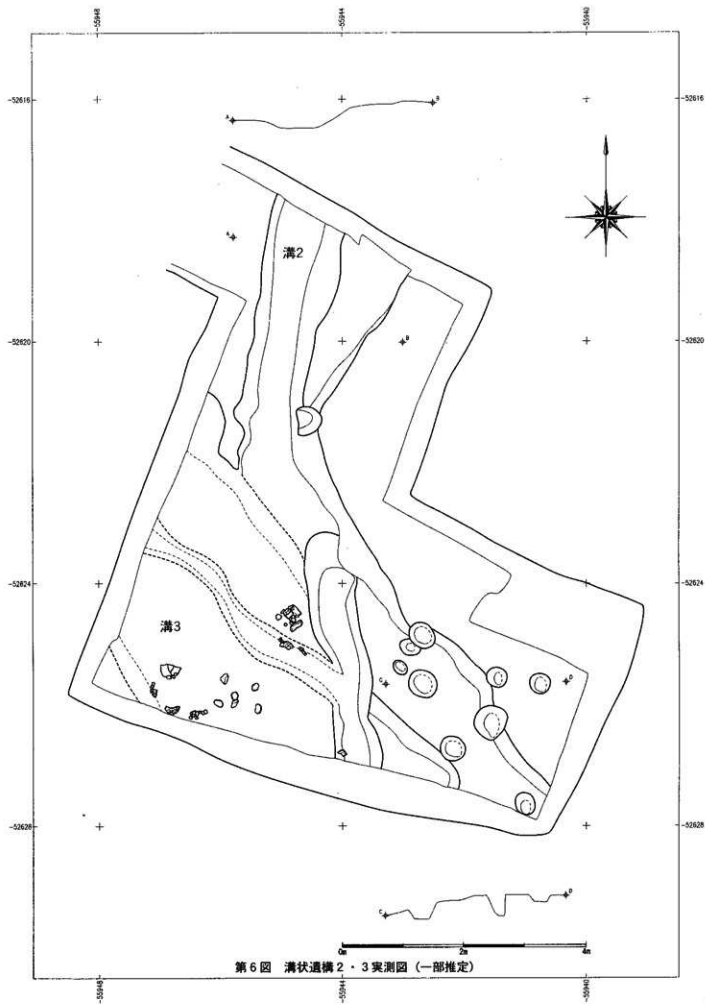
溝 3 は、拡張区の北西から南東方向に検出されている。ただし、拡張区の東端のピットが集中する一帯は、だらだらと西側に傾斜しており、溝 3 の壁として良いかは不明である。また、溝とピットの関係についても不明である。溝の幅は、はっきりとしていないが、西壁の断面から判断すれば 4.5m ほどはありそうである。検出面からは、30cm 前後の深さで、底面は幅 3.4m ほどで平坦になっている。底面の上に黒色土が水平に、その上に礫を含む黒褐色土が堆積しているようすが断面写真で認められる。写真実測された後の最終的な記録写真には、底面の中央に浅い溝が見られた。写真実測時の写真にも白い砂が見られ、断面写真にも砂層を掘ったようすが映っている。底面中央を溝 3 と同方向に流れる溝が最後に検出されたと思われる。溝 3 では、底面下の黒色土から阿島式土器と認識して調査された大きな土器片が出土しているが、その土器を特定することは一団体をのぞいて判断できない。ただ、ミ 3 と注記されている遺物は点々とある。どの時点から、溝 3 出土遺物として把握されてきたか明確でないため、あえて溝 3 出土の一括遺物として記載することをしなかった。

以上のように、不明確な点は多々あるが、溝 2・3 は、その覆土からして自然流路とは言い難く、人為的な溝と考えられ、溝 3 は土器の出土状況から弥生時代中期前半の時期といえよう。

◎ 溝状遺構 1 と 4 (図版 3)

溝状遺構 1 と溝状遺構 4 (以下溝 1 ないし溝 4 と記述) は、A 地区の北端、B 地区西端の両地区が交差点で検出された。溝 1 の上層からは、阿島式土器と認識していた土器群が出土していることから注目しながら調査されたようである。そして、最終段階で溝 1 が最下面にあることを確認したと思われることが、記録写真と最終時点のメモから伺われる。写真記録があるのみで、そこから推測すると北西から南南東に延びる溝で、規模や長さは不明であるが、底面には地山に含まれると思われる礫が見られる。溝 1 と注記された遺物はなかった。

溝 4 は、溝 1 の南側にあって、南北方向に検出された。調査開始半月後くらいに砂利溝とのメモがあり、溝から出土した糸切りの土師器杯が撮影されている。覆土は砂利であったことが、最終段階の断面写真からも伺える。掘込み面も高く、出土遺物からして弥生時代ではなく、平安時代に流水のあった溝と考えることが妥当であろう。溝 1・4 とともに人丁か自然かは不明である。

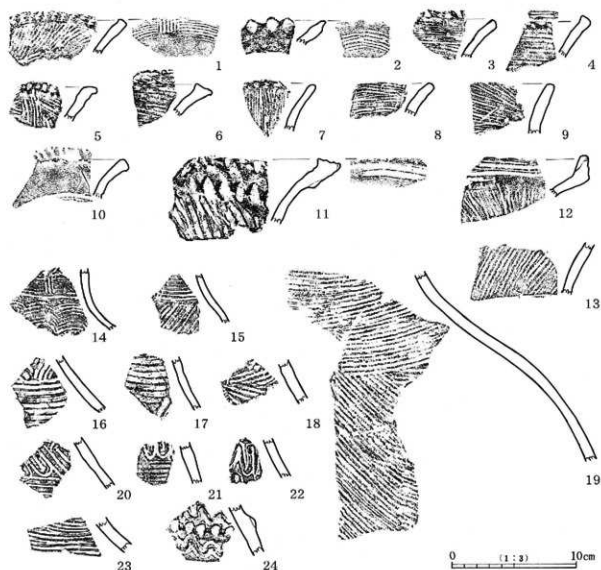


(2) 遺物

1) 土器

○ 中期前半

層位別、遺構一括といった括りで土器群を把握することは困難であったため、A・B・C・D・E・F調査区全体から出土した土器群を一括して、先行研究等に照らして中期前半と把握できる土器群を抽出した。器形は、大きく壺類と甕類に分けられる。壺類には長頸壺、広口壺、小型壺、無頸壺などがあり、甕類には、甕、鉢、厚口鉢がある。



第7図 壺類 (条痕文を基調とするもの)

壺 類

① 壺・長頸壺・広口壺等

施文状況から、以下のア～エに分類した。

ア 条痕文を基調とするもの（第7図・8図・図版6）

条痕文が基調となっている一群で、壺・広口壺・受口壺がある。

7図1～13は口縁部である。1・2は、内面にも施文されていて、1は口縁端部に押引文、口縁下に跳上文が施文される。3～6は口縁端部に刻目文や平行線文が施されている。7は口縁端部に刻目文と平行線文が見られ、器形や器厚などからイの仲間にできそうである。11は広口壺で、内面に太い沈線が2条、口縁端部にも同様の沈線が描かれている。外面には刻目が2段、下に荒々しい条痕風の沈線が見られる。12は、受口壺で立ち上がりの下面に刻目が見られる。

14～18、20～24は頸部から肩部にかけての破片である。14・15は、薄手の小型の壺で、14には貝殻腹縁で波状文が描かれている。18には跳上文が、20～22・24には二又器具による波状文が見られ、24は刻目文の凸帯も貼付されている。

19は大形の壺で、肩部で条痕文の方向を変えている。8図も同様に大形の壺で、頸部から胴上半部には横羽状に、その下は単斜に条痕文を施文している。



第8図 壺類（条痕文を基調とするもの）

イ 沈線文・縄文・刺突文等を主とするもの（第9図・10図・図版7・8）

太沈線文・沈線文・縄文・刺突文等を施文の要素として、いろいろなモチーフを描いたり、組み合わせたりして施文されている。器形は長頸壺で、量からして主体となる土器群である。

9図1～9は口縁部で、大きく開かない。口縁端部は、角状や丸状に仕上げられ、外面に刻目文を施すものもある。口縁下は、沈線文と縄文の組み合わせ（1～3）、刺突文（4・5）、条線文（6・7）等が施文されている。8はやや異質で、小型の壺の仲間とできそうである。口縁を肥厚させて刻目文、口縁端部には沈線文、口縁下は無文でその下に沈線文と縄文が巡っている。

10は、口縁と底部を欠くが頸部から胴上半部にかけての器形がわかる。頸部と胴上半部は太沈線文で重三角形が連続するように描かれている。肩部には、上下を分けるように数条の太沈線文が巡っていて、胴下半部は条痕仕上げである。

11～26及び10図1・2は頸部で、15と10図1は同一個体である。内面に絞られた痕跡の見られるもの（11・13～15）もある。施文は、沈線文と縄文の組み合わせる場合と沈線文と刺突文の組み合わせる場合が見受けられる。

27～39及び10図3～6は肩部付近で、33と34、35と10図3は同一個体である。頸部同様、施文は、沈線文と縄文を組み合わせる場合と沈線文と刺突文を組み合わせる場合が見受けられる。33～35には、刻目文を施した凸帯が貼付されている。

10図7～26は胴部である。沈線文・縄文・刺突文・ボタン状貼付文などが施文されている。9・10は、縄文施文後に沈線文を円形や波状に描いている。

ウ 赤彩されるもの（第11図・図版6・8）

赤彩された土器群で、広口壺（1・2）と長頸壺がある。沈線文・縄文・連続爪形文・連続押し爪形文・刺突文等が施文されている。

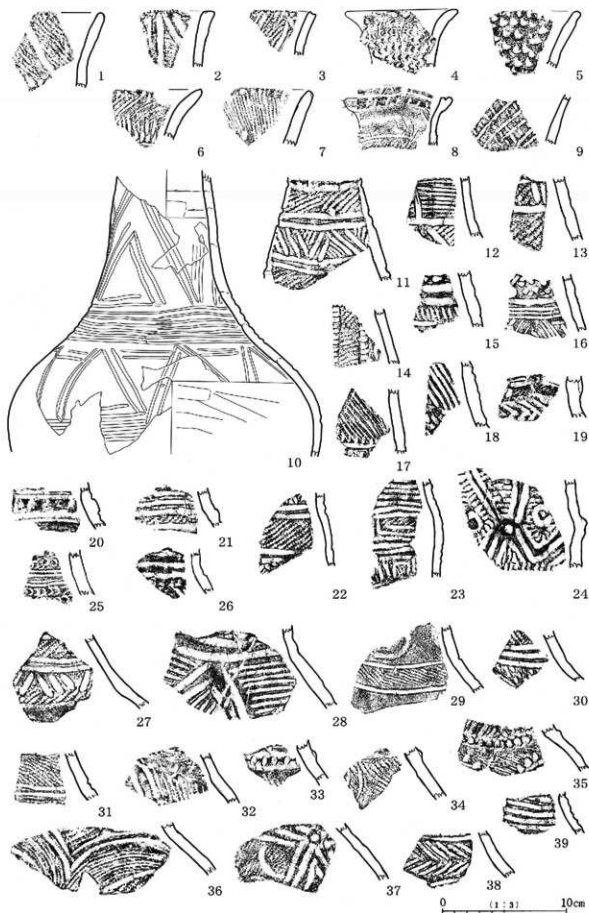
1は口縁内面に刺突文、2は縄文が施文され、赤彩されている。また、1は口縁端部に刻目、櫛状器具による直線文が、2の口縁端部には縄文と刻目が見られる。

3は、口縁から頸部にかけて縦方向のハケ目が見られる。口縁部に刺突文その下に太沈線文と連続刺突文、頸部の下部に縄文を施文した後、太沈線で連弧文を描き、連弧文に沿って連続刺突文が2条施されている。また、口縁端部と内面に刻目文が施文されている。連続刺突文は、櫛状器具を用いている。

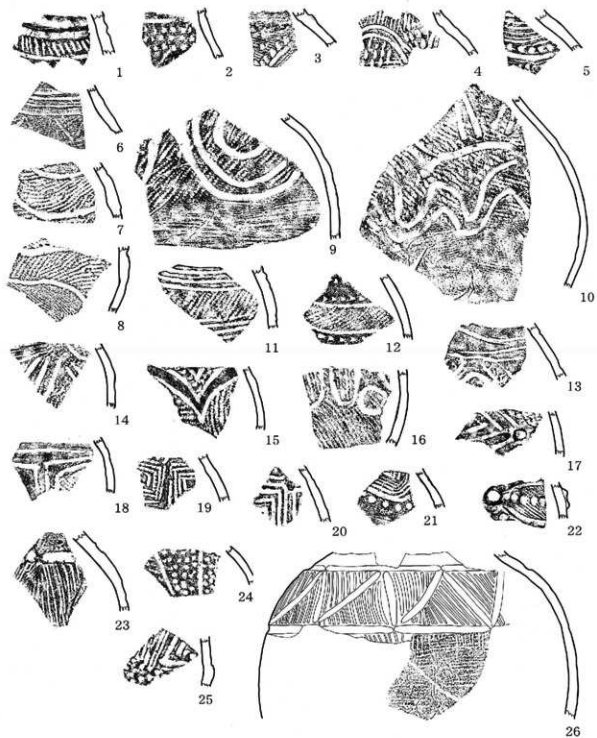
4・5は口縁部で、丸状と角状に仕上げられていて、連続刺突文・縄文・沈線文が施文されている。6～16は、頸部から肩部にかけてで、6は連続押し爪形文・太沈線文・円文が施文されている。13～15と24は、沈線文と連続刺突文が施されている。赤彩は黒味がかっていて、他の明るい赤彩に比べて異なっている。

17～30は、胴部片である。上半部は太沈線文・縄文・連続刺突文（20・23）が施文され、下半部は条痕が付されている。

31は、頸部からむらむら長頸壺で、頸部の中央付近と肩部に文様帯があり太沈線文・縄文・連続刺突文・ボタン状突起文で同様のモチーフが連続するように描かれている。文様帯との間は明るい赤彩で、胴過半部は条痕仕上げになっている。

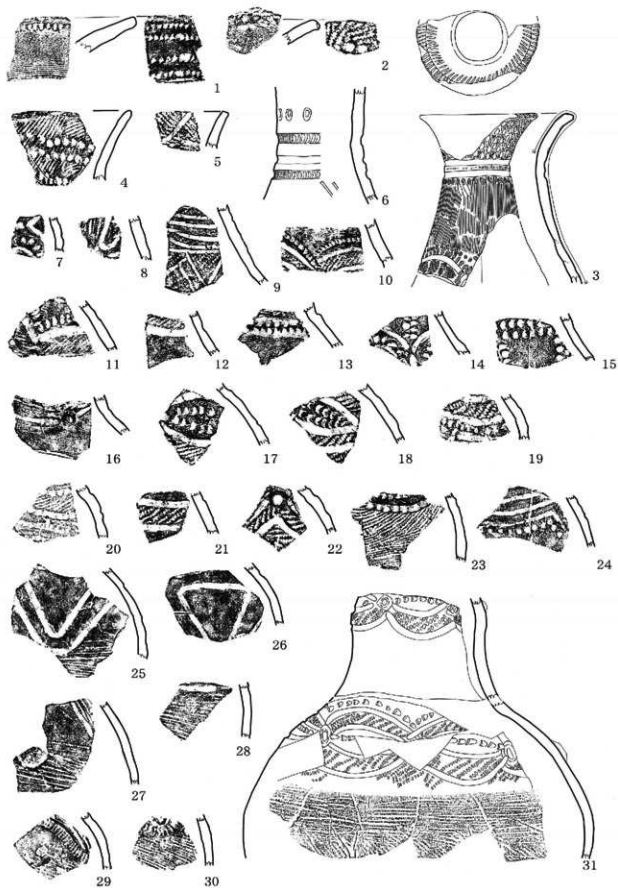


第9図 壺類 (沈線文・縄文・刺突文等を主とするもの)



0 (1:3) 10cm

第10図 査類 (沈線文・縄文・刺突文等を主とするもの)

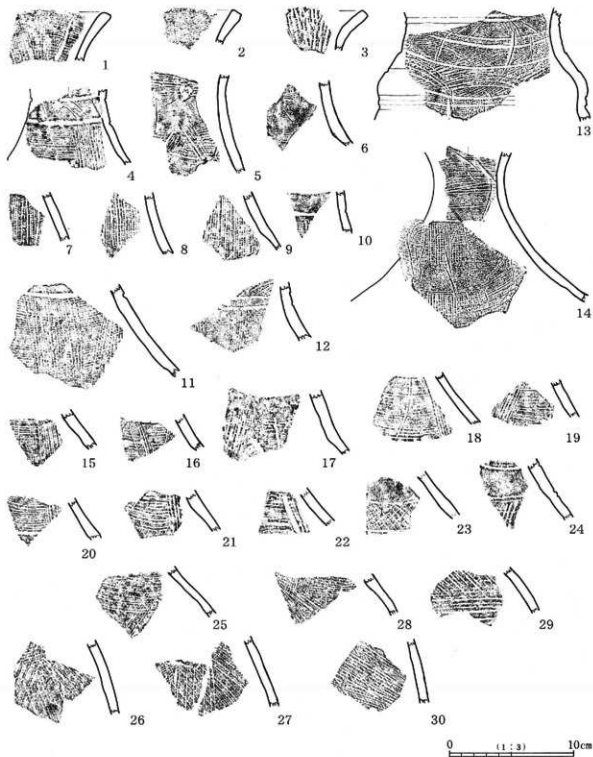


第11回 壺類 (赤彩されるもの)

エ 櫛描文を主とするもの (第12図・図版8)

櫛状器具とヘラ状器具で施文された一群で、前三者とは胎土や色調でも区別できる土器群である。細頸壺が大半で、太頸壺 (13) もある。

1・2は同一個体の口縁で、端部は角状に作られ、棒状器具による単独圧痕がある。口縁下は直線文を描き、櫛やヘラで縦に切っている。3は、沈線で跳上文状に描かれ、口縁端部には縄文が施さ



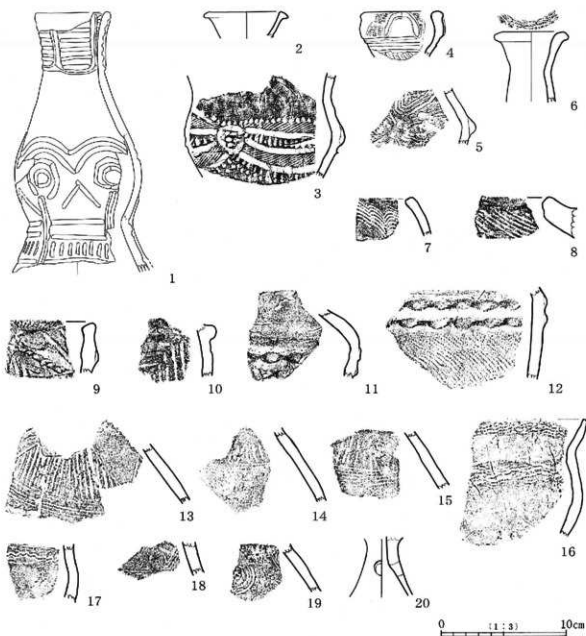
第12図 壺類 (櫛描文を主とするもの)

れている。

4～24は頸部から肩部である。頸部の内面には絞られた痕跡が見られる。直線文を描き、その上を櫛状器具やヘラ状器具で縦に切っている。中には山形に切っているもの(5・16)もある。直線文の上下は、沈線で区画されている場合とそうでない場合があり、無文帯は磨かれている。

12・13は同一個体である。ハケ目の上に沈線文や連弧文が描かれ、頸部の下部には縦に直線文、波状文が施文されている。14は部分的に赤彩されている。23は格子目文である。

25～30は胴上半部で、条痕文が施文されている。25～27は同一個体で条痕文を細い沈線が切っいて、焼成・胎土が他とは異なっている。



第13図 小型壺(1～6) 無頸壺(7)、厚口鉢(7)、不明(9～12) 中期後半及び後期(13～20)

② 小型壺 (第13図1～6 図版8)

1～3は赤色塗彩された小型壺である。1は下半部を欠いているが瓢形をしている。口縁部は縦に凸帯を貼付し、その間に沈線文が施されている。上部の膨らみには沈線文で連弧文や重円文を描き、括れ部には縦の凸帯と間を埋める沈線文が描かれている。2は直線上に開く赤彩された口縁で口唇端部は面取され、鈎状になっている。3の文様帯には縦のハケ目が見られ、縄文・太沈線文・連続刺突文・ボタン状貼付文が施されている。

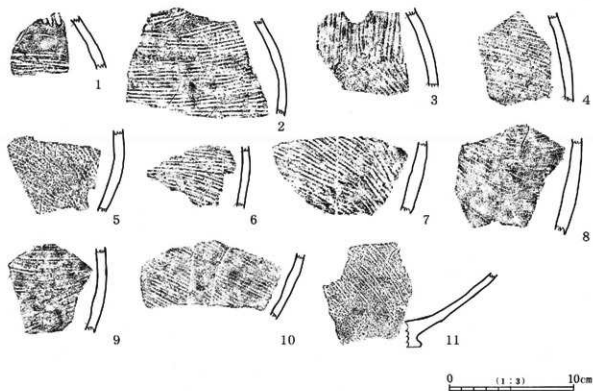
4は受口状口縁で、逆U字の粘土紐が貼付され、兩脇には縄文が施されている。その下は太沈線で平行線、斜線が描かれている。5は、瓢形壺の胴部で沈線文や刺突文が施され、ボタン状貼付文見られる。6は、小型壺の口縁部で、口縁端部に櫛状器具による短線が施文されている。

③ 無頸壺 (第13図7)

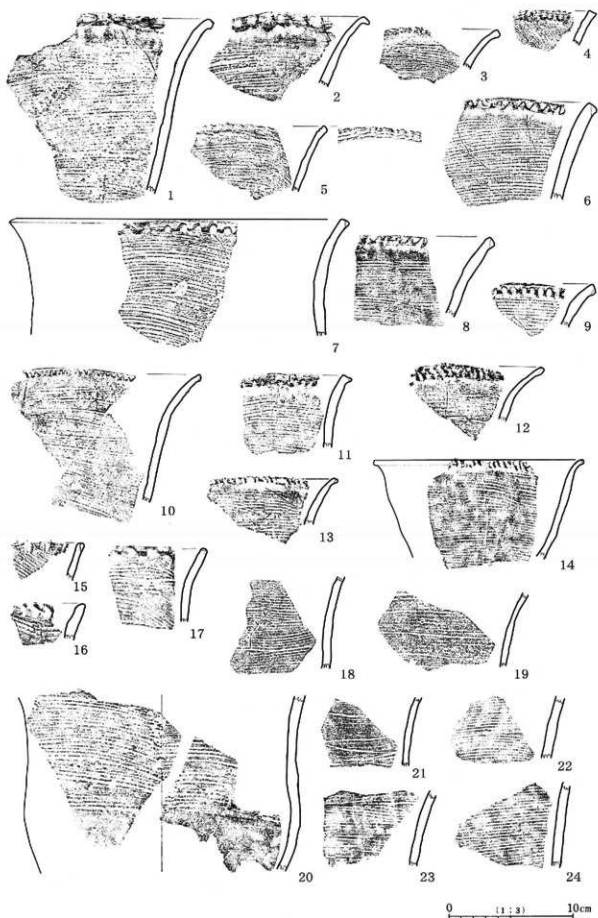
1点出土していて、櫛状器具による波状文が施文されている。

④ 胴部 (第14図)

前述したア～エのいずれかの胴下半部破片であるが、アまたはイのものであろう。いずれも条痕文が施文されている。3は、右側が上にくる器形とすべきであった。11は、立ち上がりから壺としたが、内面は甕の特徴をしている。



第14図 壺類 (胴部)



第15図 婁類（条痕文の幅・深さがほぼ均一で密に施文するパターン）

変 類

① 鉢・甕

口縁部が大きく開いていく器形が大半で、頸部が長い器形のものもある。条痕文が施文されることが基本であるが、いくつかのパターンがあり分類した。

ア 条痕文の幅・深さがほぼ均一で密に施文するパターン（第15図・16図・図版9）

口縁端部の仕上げ方と施文状況でいくつかのタイプがある。15図1～4は口縁端部を面取してその面に押引文を施し、5は面取した面は無文であるが内面に施文している。6～11は面取した面の下部をヘラや棒状器具で刻目文を施し、12～14では刻目文を深く施している。15～17は、刻むというより棒状工具を押圧している。面取した面の下部にヘラや棒状器具で刻目文を施すタイプが多い。

条痕文は、口縁下から横位に、底部近くでは右下がりに施文されている。ただ、7と20は、頸部が長い器形で、横位で弧状に条痕文が施文され、20の胴下半は削り痕が見られる。

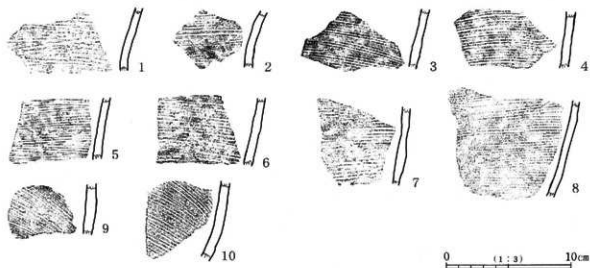
イ 条痕文の幅・深さが不均一傾向で粗に施文するパターン（第17図・18図・図版10）

口縁端部の仕上げ方と施文状況は、基本的にはアのパターンと同様である。面取した面の下部にヘラや棒状器具で刻目文を施すタイプには、17図1～4のように口縁端部が鈎状に飛び出しているものと5～13のようにそうでないものがある。4は点状の刻目文が施されているが、小破片のため全体の施文状況は不明である。14は口縁端部を丸く仕上げ上と横から細かい刻目文を施し、15・16の口縁端部は面取され押引文が施されている。

条痕文は、口縁部下から横位もあるが右下がりに施文されるものが多い。頸部から胴部にかけては、アのパターンのように整然ではなく、交差している部分が見られる。施文の先端は、太さがまちまちで間隙もあり、施文そのものも浅い。17図1・5～9は右下がりの条痕であるが、施文方向は左上がりであることから、逆に土器を置いて施文したと考えられる。

ウ 短線文が施文されるパターン（第19図1～17・図版11）

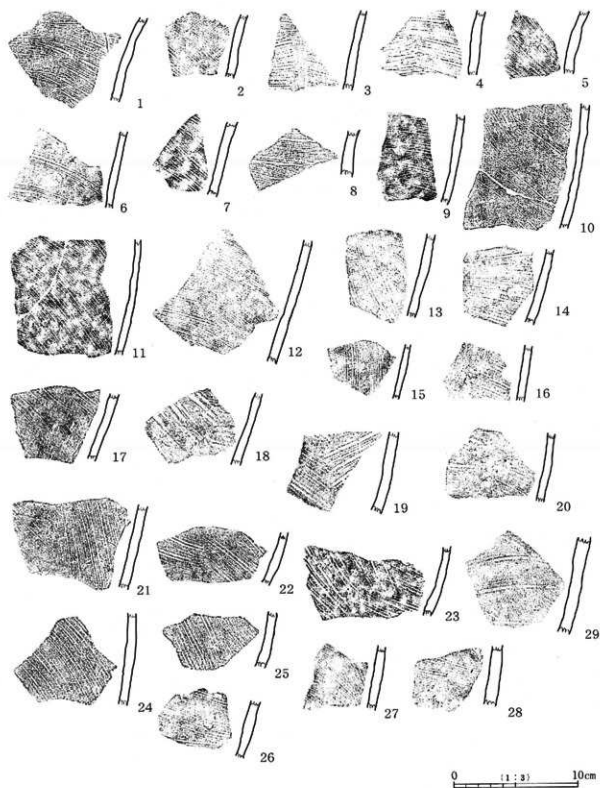
口縁端部の仕上げ方と施文状況は、前の2パターンと同様である。1～6は面取した面の下部に刻目を施していて、7は鈎状に飛び出すつくりである。8は、口縁端部を丸く仕上げ、櫛状器具で短



第16図 変類（条痕文の幅・深さがほぼ均一で密に施文するパターン）



第17図 壺類 (条痕文の幅・深さが不均一傾向で粗に施文するパターン)



第18図 壺類 (条痕文の幅・深さが不均一傾向で粗に施文するパターン)

線文が施文されている。

短線文は、口縁下から施文されていて、1～3の施文方向は左上がりであることから、逆位での施文が考えられる。また、7・8・13～17のように深く施文されたものとそうでないものがある。

エ 条痕文を縦施文するパターン (第19図18～20・図版11)

口唇部の仕上げ方と施文状況は同様で、18・19は面取した面の下に刻目文を施している。20は上下に刻目文を施文している。条痕文は、口縁下から縦に施文するが、胴部にかけての施文状況は不明である。

オ 無文のパターン (第19図21～24・図版11)

条痕文は施されていない破片で、22・23は口唇部を丸く仕上げ刻目文を施し、24は面取されているだけである。21は深鉢形である。

② 厚口鉢 (第13図8)

口縁部が一片出土している。只腹腹縁による条痕文が施文され、赤彩された痕跡が見られる。

底部類 (第20図・図版11)

1～7は壺の底部である。上げ底になっているものとそうでないものがあるが、底面からやや上が摩滅していることから、壺は凹地に据えられて使用されていたと考えられる。

8～31は甕の底部で、底部圧痕には網代(8～17)、木の葉(18～25)、布目(26～31)があり、網代圧痕16個体、木の葉圧痕12個体、布目圧痕8個体が出土している。接地面部分から外反して「く」字状に立ち上がるものとそうでないものがある。

◎ 中期後半及び後期 (第13図13～20)

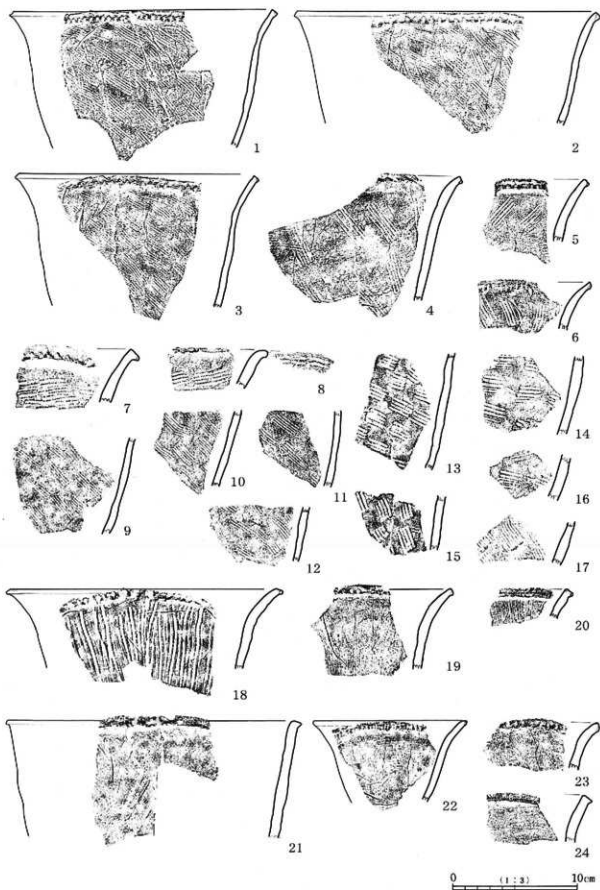
中期後半と後期の土器片がわずかに出土している。中期後半は、壺(13～15)と甕(16・17)があり、後期は、壺(18・19)と終末期の小型器台(20)がある。

◎ その他 (第13図9～12)

時期、器種を決めかねる土器片である。9は口縁部の破片で口唇部に縄文が施文され、右下がりの凸帯も貼付されている。10も口縁部であるが、少し欠けている。口縁下には重四角文がみられる。11と12は同一個体で押圧された凸帯が2条貼付され、その下には縄文が施される。隆帯の上部は無文で、大きく屈曲している。

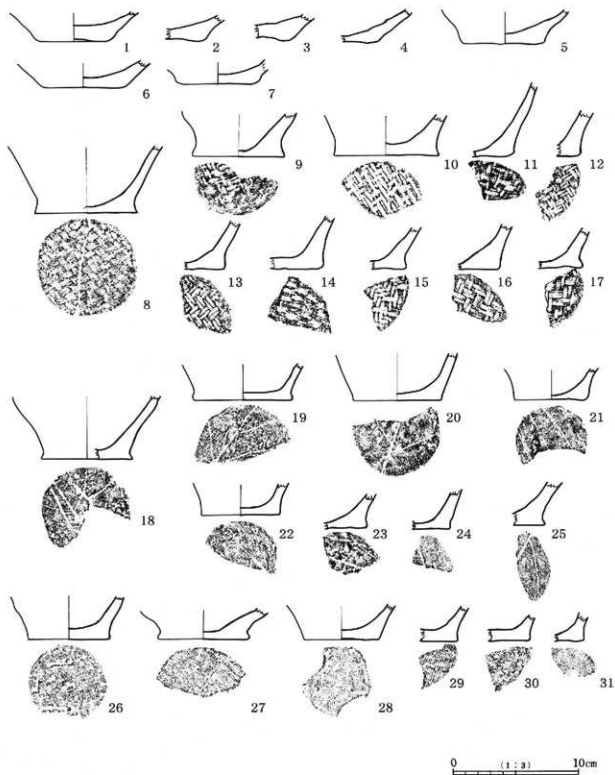
2) 石器

出土した石器群は、遺構等からの一括出土でないため、時期決定はし難い。しかし、先行研究によって明らかにされてきた弥生時代の石器の特徴や出土している土器群の量的な状況から推察したとき、大半の石器群は、弥生時代中期前半の土器群に伴う石器群としてとらえられると考えた。出土した石器群は総数146点あり、他に剥片がある。石材は、99%以上が硬砂岩で、緑色岩、緑色片岩がわずかに使われている。石器群は、耕起具、収穫具、狩猟具、工具に分類できる。



第19図 襷類

(短線文が施文されるパターン1~17、条痕文を縦施文するパターン18~20、無文のパターン21~24)

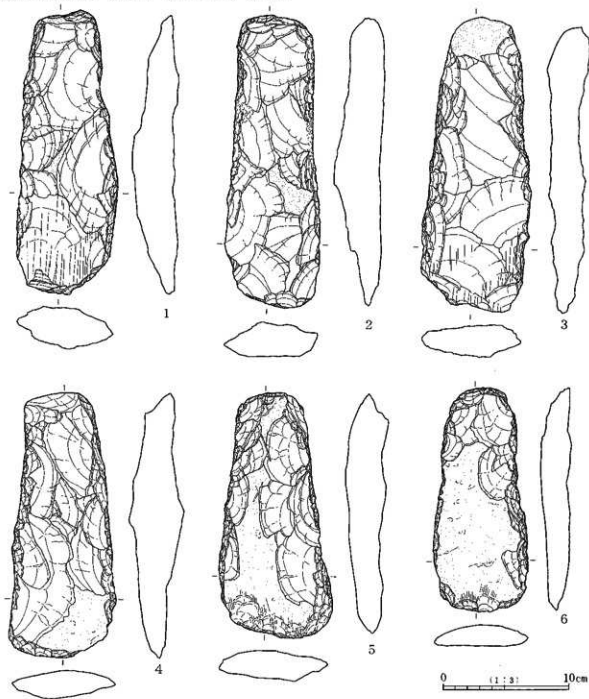


第20圖 底部 (壺1~7、甕8~31)

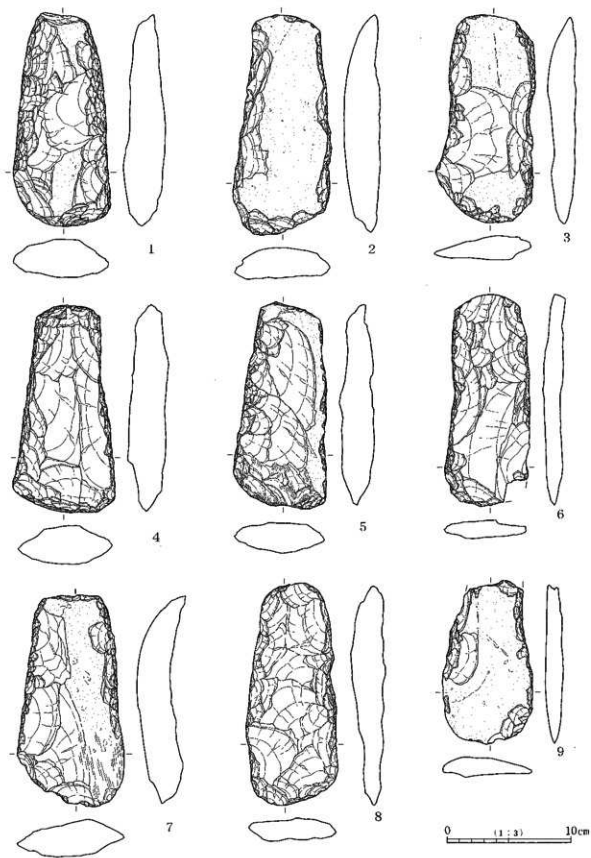
① 耕起具 (第21図・22図・23図・24図・25図1・図版12)

いわゆる打製石斧で、76点出土している。完形品が16点、頭部欠損品が30点、刃部欠損品が20点、頭部と刃部欠損品が10点である。完形品で法量を見ると、長さは最小で15.8cm、最長で23.0cmで、幅は、7～8cmほどである。円礫から剥片素材をつくり、頭部に対して刃部が広がるように製作されていて、自然面が残されている。刃部に摩耗痕が認められ、頭部なり刃部なりを欠損しているものが多い、消耗の激しい使い方をしていたと考えられる。硬砂岩で製作することを基本としているが、24図1は緑色岩製、24図9は緑色片岩製である。

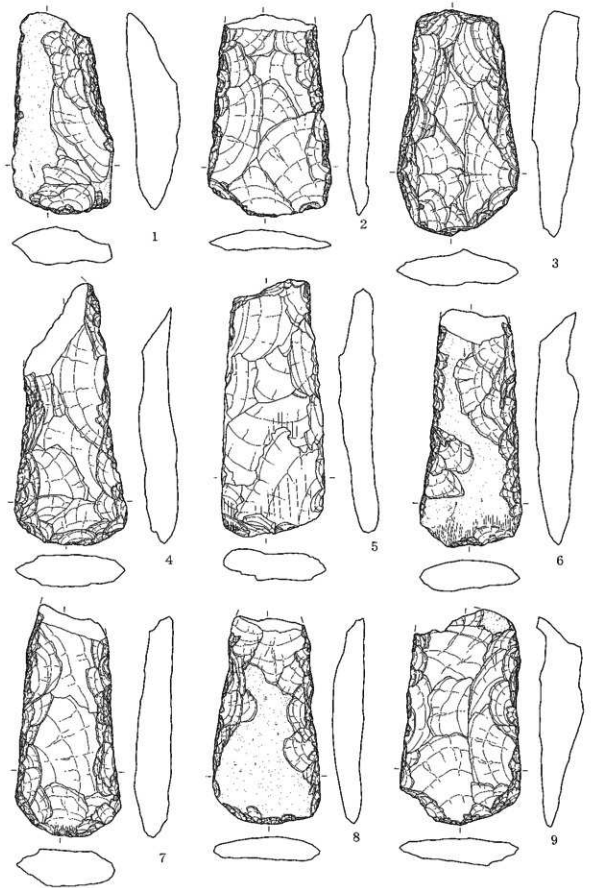
完形品 (21図～22図1～8)、頭部欠損品 (22図9～23図)、刃部欠損品 (24図1～8) 頭部と刃部欠損品 (24図9・10～25図1) である。



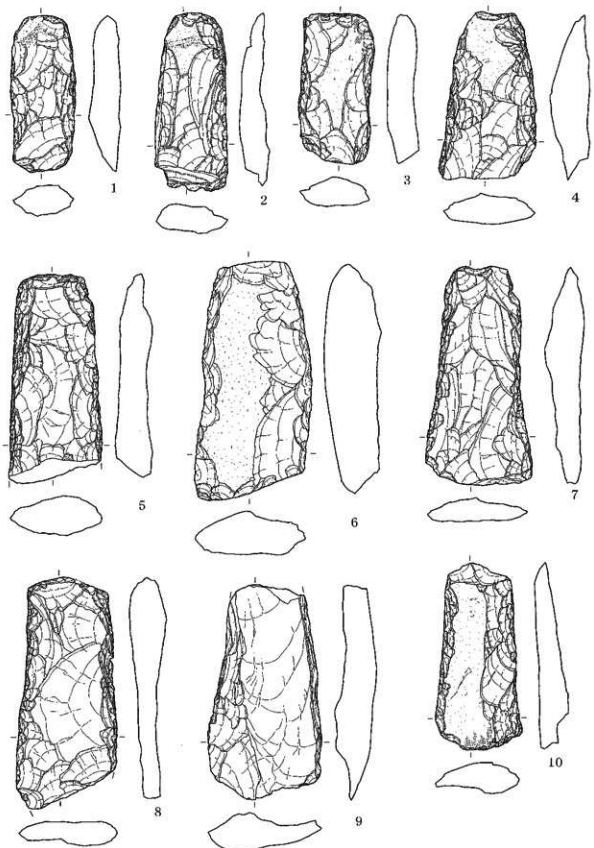
第21図 石器 (耕起具)



第22圖 石器（耕起具）



第23图 石器 (耕起具)



第24回 石器 (耕起具)

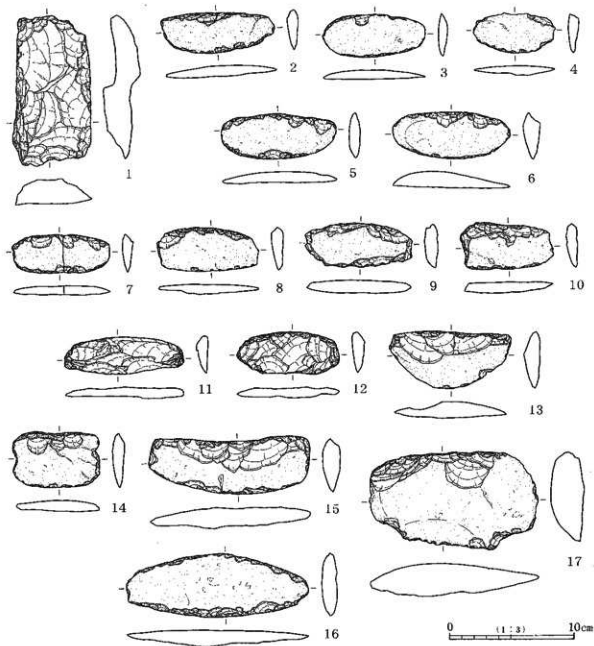
0 (1:3) 10cm

② 収獲具 (第25図2～26図2・図版13)

横刃型石包丁 (25図2～13)、抉入打製石包丁 (25図14)、横刃型石器 (25図15～17) 有肩扇状形石器 (26図1・2) がある。

横刃型石包丁は39点出土している。うち、完形品は28点、欠損品は11点であった。円礫から剥離した横長剥片を素材にして、頭部と刃部に調整を加えてある紡錘形をした石器である。中には、10のように全体が長方形しているものや、13のように半月形したものもある。図示しなかったものの中には、楕円形剥片を素材にして製作され、幅広になっているものもある。硬砂岩で製作することが基本であるが、3は緑色岩製、11は緑色片岩製である。

抉入打製石包丁は、完形品1点、欠損品1点の2点が出土している。楕円形剥片を長方形にして両サイドから抉り調整している。いずれも硬砂岩製である。



第25図 石器 (耕起具・収獲具)

横刃型石器は12点出土している。15と16のような細長の形態のものと17のような幅広の形態のものがある。12のうち前者は3点、後者は9点で、硬砂岩製である。

有肩扇状形石器は5点出土している。完形品は26図1の1点で他は欠損品である。円礫を剥離して剥片を取り、両脇から挟み調整している。

以上の収穫具の刃部を観察したが、ロー状光沢は認められなかった。

③ 狩猟具

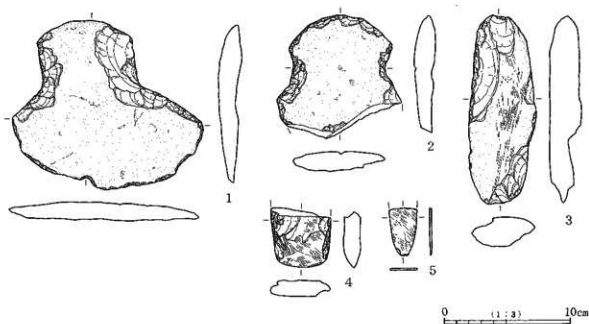
黒曜石製の石鏃2点と頁岩製の有茎五角形系の石鏃（図版13）1点が出土している。

④ 工具（第26図3～5・図版13）

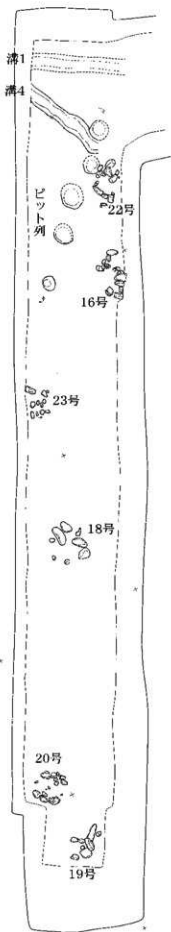
磨製石斧の未成品が3点、緑色岩製の磨製石斧の頭部欠損品が1点（4）、敲打器2点が出土している。3は緑色片岩製で、剥離痕が大きく残っているものの表面は研磨されており磨製石斧の未成品と考えたが、欠損品としてよいかもしれない。他の磨製石斧未成品2点は剥離痕、敲打痕のあるもので緑色岩製である。5は磨製石鏃かと思われたが、縁辺が角状になっており器種を決めかねる磨製の石製品である。

⑤ その他

10cm程度の円礫の周りに剥離痕があって、礫器とできる石器が2点出土している。



第26図 石器（収穫具・工具）



第27図 古墳・奈良・平安時代遺構図

3 古墳時代

(1) 遺構

1) 住居址

① 19号住居址

A地区のIIグリットにおいて、調査時点では祭祀址と把握していたものであるが、カマドと判断される石組みの存在から住居址と確定し、主要な出土遺物から古墳時代とした。

出土遺物は土師器の甕・甔・坏・高坏があり、須志器は甕の破片があるが混入した可能性もある。

甕(28図-1)ほぼ完形品で高さ31cm、口径15cm、胴部最大径が底から15cmにあり径は36.5cmを測る。胴部に右下がりて不規則かつ粗雑な暗文を施し器面調整している。胴部に若干の炭化物の付着がみられ、煮沸の用に供されたと判断されるが、口縁部が直立的に外反し暗文施文から蓋的な性格も排除できない。胎土・焼成ともに良好であり、内外面ともに炭化物付着部以外は橙褐色を呈し、胎土中に白色の微石粒を含む。

甕(28図-2)口縁部のみ1/10程度残存し、口径は19cmを測り、口縁部はくの字状に外反する。胎土・焼成ともに良好であり、残存部は全体が丁寧な磨き仕上げされている、外面は明灰褐色で炭化物の付着があり、内面は鈍い橙褐色を呈する。

甕(28図-3)底から5cm程残存するもので、底面はわずかに突状になる平底である。胎土中に白色小石粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに赤褐色で一部暗褐色部もある。

甔(28図-4)約1/4が残存し、口径は20cm、残存高11.8cmを測る。緩やかに内湾するが口縁部はほぼ直立上となる。口縁部から8cm程下がった位置にゆがんだ扁平状をなす一對の取っ手を付している。外面は前面に櫛状工具による縦の連続した器面整形痕があり、内面は同様工具による右下がりの器面調整後口縁部から3cm以下は磨き仕上げが胎土・焼成ともに良好であり、胎土中に赤色の小石粒を含む。外面は明褐色および明赤褐色、内面は明灰褐色を呈する。

坏(28図-5)口径12.6cm・高さ6.2cmを測る完形品である。口縁部がわずかに外反し、比較的深さを感じるもので椀状を呈する。胎土・焼成は良好で胎土中に白色小石粒を含み、甕3と共通する。外面は明褐色を呈するが半分ほどに炭化物が付着し、一部に2次焼成によって橙色に変色した個所が観察でき、直接火にかけて使用された可能性がある。内面は全体が赤褐色を呈し、横方向の磨きが丁寧になされ、丁寧に仕上げられているが、底には刺突状の荒れがあり口唇部は使用痕と判断される細かな連続した欠が認められる。

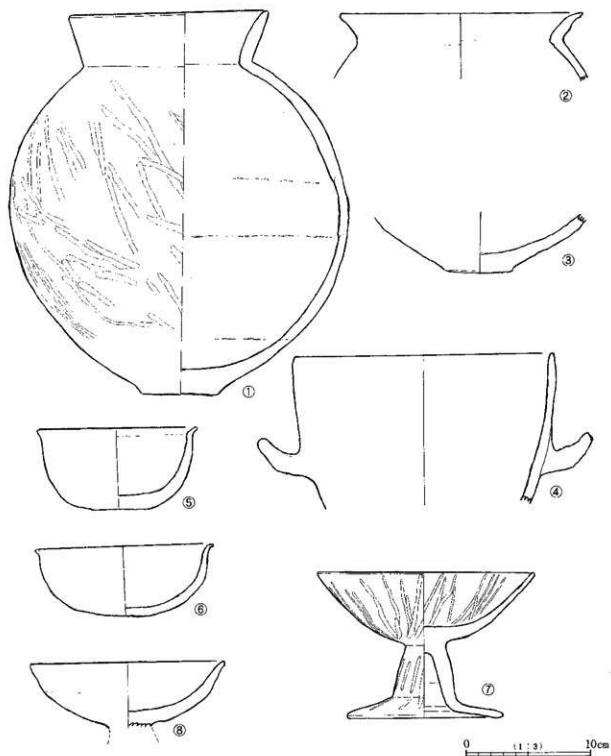
坏(28図-6)口径14cm・高さ5.4cmを測り、1/4が残存する。口縁部が緩やかにわずかに外反する。外面は丁寧な横方向の磨き仕上げがなされ、内面は縦の暗文風の磨き仕上げがなされている。胎土は清涼であり焼成も良好で断面は中心部が黒色のサンドイッチ状で、内外面ともに橙褐色を呈する。他の土師器との胎土とは異質のものである。

高坏(28図-7)高さ11.8cm、口径16.5cm、脚底径12cmを測る完形品である。内外面ともに0.5から1cmの幅で縦方向の粗雑な暗文が施される。全体に明褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。坏部内面の底の部分は先端の尖った棒状のもので刺突したアバタ状となっており、使用痕跡と判断され、そのため暗文も消えている。

高坏(28図-8)坏部のみが残存し、口径は15cmを測る。焼成はほぼ良好であるが胎土は白色の小石粒を含み粗雑な感を受ける、外面は磨き仕上げられ、赤褐色と橙褐色を内面は赤褐色呈する。

図化はできなかったが、土師器には甕、坏もしくは高坏と考えられる小破片があるが図化したものと同様のものである。

土師器のいずれの器種も5世紀後半（終末）の様相を示すものであり、木遺構の時期ととらえられる。坏および高坏には胎土・焼成ともに良好で精緻なものと粗雑で仕上げも雑な感じを受けるものがあり、他地域からの搬入品と在産物が混在する。また、坏の2次焼成や高坏・坏の使用痕跡などは



第28図 19号住居址出土遺物

往時の用途と使用実態などの考究材料となる可能性がある。

② 23号住居址

A地区の6グリットにおいて、カマドと判断される石組みの存在から住居址と確定し、主要な出土遺物から古墳時代とした。

出土遺物は土師器の甕・坏がある。

甕 (29図-1) 図化は底部のみであるが、接合できないが胴部の大きな破片があり、胴部は長胴で、外面は縦方向のヘラ磨きが施され、底部は2次焼成により荒れている。胎土は良好で白色小石粒を含む。焼成は2次焼成のため甘い感じである。外面は橙色、内面は黄橙色を呈する。

坏 (29図-2) 口径16cm、高さ6cmを測り、1/2が残存する。比較的厚手で口縁部はわずかに外反する。胎土・焼成は良好である。外面は口縁部が明褐色、底部の一部が鈍い褐色のほかは炭化物が付着し黒色であり、磨かれているようであるが確定できない。内面は暗褐色を呈し、磨き仕上げがされている。外面の状況は2次焼成があり、直接火にかけて用いられた可能性が高い。

坏 (29図-3) 口径12cm、高さ5.4cmを測り2/3が残存する。口縁部はほぼ直立し小型の坏である。外面は口唇部と底の一部が黒色で他はにぶい橙色である。内面は黒色でいわゆる内黒である。胎土は良好であるが、焼成がやや甘く表面全体にザラザラ感がある。

甕の長胴化および内黒坏の存在から6世紀後半の時期と判断され、19号住居址とはほぼ1世紀の隔りがある。

(2) 遺構外遺物

須恵器高坏もしくは壺口縁部 (29図-4) A地区2グリットから出した無蓋高坏もしくは壺口縁部と思われる小破片である。内外面ともに灰色で、胎土・焼成とも極めて良好で他地域からの搬入品である。5世紀代と判断され、他に高坏脚部破片もある。

須恵器蓋 (29図-5) A地区10グリットからの出上品である。口径13cm、高さ4cmを測り、1/2残存する。全体にシャープな作りで、内外面ともに青灰色を呈する。土師器甕破片があり住居址の存在も推測される。

A地区18号住居址内に混在して4世紀後半と判断される有段口縁の壺の小破片があるが図化できない。また、同じく5世紀と判断される小型の壺もしくはハソウの破片もある。

Bトレンチからも多くの古墳時代遺物が出土しているが、遺構の特定ができず遺構外遺物として扱う。

土師器甕 (29図-6) B地区5グリット出土で、口径23.6cmを測り、1/4が残存する。内外面とも褐色で、胎土は良好であるが、焼成はあまり良くなく、表面がざらざらしている。

土師器甕 (29図-7) B地区4グリット出土で、口径17.6cmを測り、図化部分はほぼ完存する。口縁部がくの字型に外反し、胴が長めの器形である。外面はにぶい褐色および橙色で、部分的に炭化物が付着する。内面は黒褐色である。胎土は良好であるが、焼成はあまり良くない。

土師器甕 (29図-8) B地区6グリット出土で、底径5.5cmを測り、図化部分はほぼ完存する。外面は橙色で一部褐色である。内面は褐色である。胎土・焼成は普通である。

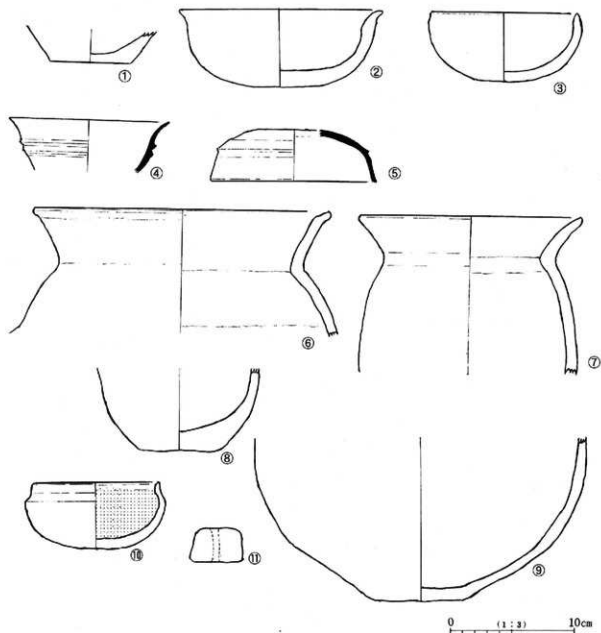
土師器壺 (29図-9) B地区2グリット出土で、底径7.5cmを測る。球形の胴部で外面はザラザラ

であるが、内面はつるつるに磨かれている。外面はにぶい黄橙色で、内面はにぶい橙色およびにぶい黄橙色である。胎土・焼成は良好である。

土師器坏 (29図-10) B地区7グリット出土で、口径10cmを測る完形品である。口縁部が内傾して直立上になり、小さな肩部を有する。外面はにぶい黄橙色で、内面は内黒である。胎土・焼成は普通である。

土製紡錘車 (29図-11) B地区5グリット出土で、上径3.5cm、下径4cm、高さ2.7cmを測る。中央部に径5mの穴が穿たれ、表面は橙色である。微石粒・雲母を含み、胎土・焼成は良好である。

以上、遺構外からの出土遺物であるが、図示したもの以外にも当該期の土師器・須恵器が認められ、調査範囲外に連続的に当該期の遺構が存在することを窺わせる。



第29図 23号住居址 (1~3) 遺構外出土遺物 (4~11)

4 奈良・平安時代

(1) 遺構

1) 住居址

① 16号住居址

A地区の4グリットにおいて、カマドと判断される石組みの存在と多量の出土遺物から住居址と確定し、主要な出土遺物から平安時代とした。

出土遺物が今次調査において最も多く、土師器のカキ目を施した長胴甕・小型甕が多量にあり、坏も多い。須恵器には甕・壺・坏が多数ある。灰釉陶器は壺・瓶子片がある。

土師器甕 (30図-1) 口径24.8cmを測る長胴の甕で全体の1/8が残存する。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整痕が顕著である。内面は口縁部に横方向のカキ目調整が2段にわたって残り、屈折部以下はヘラ削り調整され部分的に輪積み痕が残る。胎土中にわずかはあるが白石粒と赤色鉱物粒を混入するが精良で焼成も良好である。内外面ともに浅黄褐色で部分的に黒褐色部分もあり、外面にはわずかではあるが炭化物の付着が認められる。

土師器甕 (30図-2) 口径24cmを測る長胴の甕で1/7が残存する。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施され、全体ににぶい橙色を呈するがほぼ全体に炭化物が付着する。内面は口縁部が右下がりの斜め方向のカキ目痕を残し、屈折部以下はヘラ削り調整され部分的に輪積み痕が残る、全体が橙色である。胎土中に白石粒を含みやや粗く、焼成は普通であるが内面ではザラザラした感じを受ける。

土師器甕 (30図-3) 口径19cmを測るやや小型の甕で底部を欠くが図化部分はほぼ完存する。外面は口縁部下のくびれ部以下に丁寧な縦方向のカキ目調整が施され、全体に褐色を呈し炭化物が付着する。内面は屈折部上位にわずかではあるが斜めのカキ目痕が残る、口唇部はヘラ削り調整される。屈折部以下はヘラ削り調整され、屈折部以下の胴部も丁寧に成形され輪積み痕などの確認はできない。内面全体が橙色を呈する。胎土は精良で焼成も良好で硬く焼きあがっている。

土師器甕 (30図-4) 口径23cmを測る長胴の甕で1/8が残存する。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施され、灰白色および褐色を呈する。内面は口縁部に横方向と右下がり斜めのカキ目調整痕が残る、屈折部以下はヘラ削り調整されかなり明瞭に輪積み痕が残る、にぶい橙色およびにぶい褐色を呈する。胎土中に白色の微石粒を含むが極めて良好である。

土師器甕 (30図-5) 口径22.4cmを測る甕で底部を欠くが図化部分は2/3が残存する。外面は口縁部下のくびれ部以下に右下がりの丁寧な縦方向のカキ目調整が施され、全体に橙色を呈する。内面は屈折部上位に水平の、その上部に斜めのカキ目痕が残る、口唇部は横手で調整される。屈折部以下はヘラ削り調整され、屈折部以下の胴部も丁寧に成形され、わずかに輪積み痕が確認される。内面全体が暗褐色を呈する。胎土は精良で焼成も良好である。

土師器甕 (30図-6) 口径20cmを測る甕で口縁部1/7が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に丁寧な縦方向のカキ目調整が施され、炭化物が付着し暗褐色を呈する。内面は屈折部上位にわずかではあるが横方向のカキ目痕が残る、口唇部は横手で調整される。屈折部以下は横削り毛痕が残る、にぶい橙色を呈する。胎土中に金雲母粒を含み、焼成ともに良好である。

土師器甕 (30図-7) 口径23.2cmを測る甕で口縁部1/8が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に丁寧な縦方向のカキ目調整が施され、浅黄褐色および橙色を呈する。内面は屈折部上位にわずかではあ

るが横方向のカキ目痕が残り、口唇部は横なで調整される。屈折部以下は横刷毛痕が残り、浅黄橙および褐色を呈する。胎土中に白色石粒を含み、焼成ともに良好である。

土師器甕底部(30図-8)底径6cmを測り、小型甕の可能性もある。外面は口横方向のカキ目調整が施され、にぶい黄褐色を呈し木葉痕が付着する。内面の底部付近に指頭圧痕があり、それより上部はハケ調整され、灰黄褐色を呈する。胎土・焼成ともに良好である。

土師器甕底部(30図-9)底径6cmを測り、木葉痕がある。外面は底部際に横方向のカキ目調整が施され、その上部は2次焼成のためか器面の荒れが著しくカキ目が判断できず、褐色と黒褐色を呈する。内面の底部付近はヘラと指頭圧痕があり、それより上部は輪積痕をなで調整し、赤褐色を呈する。胎土中に白色石粒と金雲母を含み焼成ともに良好である。

土師器小型甕(30図-10)口径16cmを測る小型甕でほぼ1/4が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向の、底部際に横方向のカキ目が施され、にぶい褐色を呈する。内面胴部にヘラ削りの痕跡を残し、口縁部は横なで調整され、橙色および黒褐色を呈する。胎土中に白色石粒を含み、焼成ともに良好である。

土師器小型甕(30図-11)口径15cmを測る小型甕で凶化部分はほぼ完存する。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施され、大半が黒褐色で部分的に橙色を呈する。内面はヘラ削りの後なで調整され、黒褐色および橙色を呈する。胎土・焼成ともに良好である。

土師器小型甕(31図-1)口径16cmを測る小型甕で1/3が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下にやや雑の感のある縦方向のカキ目調整が施され、浅黄橙および褐色を呈する。内面は屈折部上位にわずかではあるが横方向のカキ目痕が残り、口唇部は横なで調整される。屈折部以下は横刷毛痕が残り、浅黄橙および褐色を呈する。胎土中に白色石粒を含み、焼成ともに良好ではあるが、全体に雑な感じである。

土師器小型甕(31図-2)口径12.8cmを測る小型甕で2/3が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施され、下部には横方向のカキ目があり、明褐色を呈する。内面は屈折部上位にわずかではあるが横方向のカキ目痕が残り、口唇部は横なで調整される。屈折部以下はヘラ削りの後、横なでされ、大半が黒色であるが部分的に黒褐色および橙色の部分もある。胎土・焼成ともに良好である。

土師器小型甕(31図-3)口径14cmを測る小型甕で口縁部1/4が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施され、明赤褐色を呈する。内面は口唇部近くまで炭化物が付着し全面黒色である。胎土は普通であるが、2次焼成のため荒い感じを受ける。

土師器小型甕(31図-4)口径11.5cmを測る小型甕で口縁部1/5が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施され、にぶい黄褐色を呈する。内面は屈折部上位にわずかではあるが横方向のカキ目痕が残り、口唇部は横なで調整される。屈折部以下に輪積痕が残り、黒褐色および褐色を呈する。胎土・焼成ともに普通である。

土師器小型甕(31図-5)底径5cmを測り、木葉痕がある。外面は底部際に横方向のカキ目調整が、その上部は横方向のカキ目が施され、にぶい黄褐色を呈する。内面は炭化物が付着し黒色である。胎土・焼成ともに普通である。

土師器杯(31図-6)口径12cm、底径7cm、高さ3.6cmを測り、2/3が残る。外面は明黄褐色を呈し、内面は内黒である。糸切底である。胎土・焼成は良好である。

土師器杯 (31図-7) 口径13.2cm、底径7cm、高さ4cmを測り、1/3が残る。外面はにぶい黄橙色を呈し、内面は内黒である。糸切底である。胎土・焼成は2次焼成による荒れがあり、あまりよくはない。

土師器杯 (31図-8) 口径12.8cm、底径6cm、高さ4.3cmを測り、3/4が残る。外面はにぶい橙色を呈し、内面は内黒である。糸切底である。胎土・焼成は2次焼成による荒れがあり、あまりよくはない。

土師器碗 (31図-9) 底径5cmを測り、図化部の1/3が残る。外面は橙色を呈し、内面は黒褐色ではあるが内黒である。胎土・焼成は普通である。

須恵器甕 (31図-10) 口径6cmを測る大型甕で図化部の1/10が残る。外面は横なでされているが部分的に叩き目痕が残る。内外面ともに青灰色を呈し、胎土・焼成は良好である。

須恵器甕 (31図-11) 底径8.8cmを測る平底の甕底部で、図化部の1/4が残る。外面は暗灰色および灰色を呈し、内面は釉薬が付着し暗緑色を呈する。胎土・焼成は良好である。

須恵器甕 (31図-12) 底径11cmを測る高台付の甕底部で、図化部の1/4が残る。外面は暗灰色、内面は釉薬が付着し灰白色を呈する。内外面ともに焼きハゼがあるが胎土・焼成は良好である。内面の釉薬付着は底中心部に限られ口縁部の狭くない壺型の器の可能性もある。

須恵器甕 (31図-13) 底径10cmを測る高台付の甕底部で、図化部の1/3が残る。内外面ともに暗紫灰色を呈する。胎土・焼成は良好である。

須恵器甕 (31図-14) 底径8cmを測る高台付の底部で、図化部の1/3が残る。外面は灰色、内面は釉薬が付着し中央付近は緑色でそれ以外は灰白色を呈する。胎土・焼成は良好である。内面の釉薬付着は底中心部に限られ口縁部の狭くない壺型の器の可能性もある。

須恵器杯 (31図-15) 口径13cm、底径5cm、高さ3.5cmを測る。底部は完存し、口縁部は1/10が残る。糸切底で糸切後なで調整されている。内外ともにろくろ痕が顕著である。内外ともに青灰色を呈し、胎土中に小石粒を含むが焼成とも良好である。

須恵器杯 (31図-16) 口径13cm、底径5cm、高さ4cmを測る。口縁部は1/4、他は1/2が残存する。糸切底で、内外ともにろくろ痕が顕著である。外面は灰白色、内面は灰色を呈し、胎土中に小石粒を含み良好とはいえないが、焼成は良好である。

須恵器杯 (31図-17) 口径11.2cm、底径4.7cm、高さ3.5cmを測る。底部は完存し、口縁部は1/20が残る。糸切底で、内外ともにろくろ痕がわずかに認められる。外面は灰白色、内面は灰色で口縁部が灰白色である。胎土は良好であるが、焼成はやや軟質である。

須恵器杯 (31図-18) 口径12cm、底径4.8cm、高さ3.3cmを測り、1/3が残る。糸切底で、内外ともにろくろ痕が認められる。外面は明緑灰色で、内面は灰色である。胎土・焼成ともに良好であり、内面は底部を中心に摩擦が著しい。

須恵器杯 (31図-19) 口径11.8cm、底径5.3cm、高さ3.6cmを測り、1/4が残る。糸切底で、内外ともにろくろ痕がわずかに認められる。内外面ともに灰白色で一部がにぶい橙色である。底部は極めて薄く仕上げられている。胎土は普通であるが、焼成は軟質である。

須恵器杯 (31図-20) 底径5cm、残存高3.5cmを測る。底部は完存し、口唇部を欠くがほぼ全体形が把握される。糸切底で糸切後なで調整されている。内外ともにろくろ痕がある。内外ともに青灰色を呈し、胎土中に小石粒を含むが焼成とも良好である。内面底部の中心は摩擦が著しい。

須恵器坏 (31図-21) 口径12.8cm、底径5.2cm、高さ5cmを測り、底部は完存し、口縁部は1/7が残る。糸切底で、内外ともにろくろ痕がわずかに認められる。内外面ともに橙色で還元炎焼成されていない。胎土は普通であるが、比較的硬質の焼成である。

須恵器坏 (31図-22) 口径13cm、底径6cm、高さ5cmを測り、底部は完存し、口縁部は1/2が残る。糸切底である。磨滅のためろくろ痕はほとんど認められない。外面は浅黄褐色と灰白色、内面は浅黄褐色である。胎土は普通であるが、焼成はあまりよくなく、いわゆる牛焼け状である。

須恵器坏 (31図-23) 口径11.8cm、底径6cm、高さ3.9cmを測り、1/2が残る。糸切底で、内外面ともにろくろ痕が顕著である。外面は灰白色、内面は黄褐色である。胎土は普通であるが、いわゆる牛焼け状で焼成はあまりよくなく、外面の磨滅は著しい。

須恵器坏 (31図-24) 底径5.2cmを測り、底部の1/2が残り、糸切底である。内外ともに青灰色を呈し、極めて良好な胎土と焼成であり、地元産ではない可能性が高い。

須恵器坏は図示した以外に余り良好ではないが還元炎焼成の青灰色系の破片10個体以上と橙色系の破片3個体以上が出土している。

灰釉陶器壺 (31図-25) 底径8.8cmを測る高台付の底部で、図化部の2/3が残る。外面は緑色および乳青灰色の釉葉が高台端部まで付着する。内面は灰白色を呈する。底部中心は2mの薄さである。

灰釉陶器壺 (31図-26) 底径7.8cmを測る高台付の底部で、図化部の1/2が残る。ある。外面は緑色の釉葉が高台端部まで付着する。内面は底部に緑色の釉葉が付着しそれ以外は灰白色を呈する。

灰釉陶器壺 (31図-27) 底径4cmを測る高台付の底部である。外面は緑色の釉葉が欠落し、黒色で艶のある薄い釉葉が高台端部まで付着する。内面は緑色の釉葉が底部に付着し、それ以外は浅黄色である。

図示以外に1点の底部破片がある。

刀子 (31図-28) 先端部を欠き、残存長6cm、刃部長4cm、刃部幅2.5cmを測り、関が上部にある形態である。

遺物出土量は土師器・須恵器は量・器種ともに他の住居址に比べ圧倒的な多さである。いずれの住居址も部分的な調査にとどまっておらず全体像を把握することはできないが、今遺跡において当該期の中心的な家と判断され、特別な性格を有していた可能性が高い。

② 18号住居址

A地区の7・8グリットにおいて、カマドと判断される石組みの存在から住居址と確定し、主要な出土遺物から平安時代とした。

出土遺物は土師器のカキ目を施した長胴甕・小型甕、坏が須恵器は甕胴部片、坏がある。

土師器甕 (32図-1) 口径17.2cmを測る甕で、口縁部1/10が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施される。内面は屈折部に横方向のカキ目が残る口唇部は横なでされ、胴部には輪積痕が部分的に残る。内外面ともに褐色である。胎土・焼成は良好であるが、外面は荒れている。

図示以外に甕口縁部破片が8点・底部破片1点がある。

土師器坏 (32図-2) 底径8cmを測り、図化部の1/3が残る。糸切底で、土師器坏としては大型である。外面はにぶい褐色を呈し、内面は内黒である。胎土・焼成は普通である。

土師器坏 (32図-3) 底径5.4cmを測る糸切底である。外面はにぶい褐色を呈し、内面は内黒である。

胎土・焼成は普通である。

土師器杯(32図-4) 底径5cmを測る糸切底である。外面にはぶい黄橙色を呈し、内面は内黒である。胎土・焼成は普通である。

土師器皿(32図-5) 口径14cm、底径6.6cm、高さ3cmを測り、2/3が残る。外面にはろくろ痕が残り、橙色である。内面は内黒である。

須恵器甕(32図-6) 口径31cmを測る比較的大型の甕で図化部の1/5が残る。外面は横刷毛調整される。内外面ともに暗青灰色を呈し、胎土・焼成は良好である。

須恵器杯(32図-7) 口径12.8cm、底径5cm、高さ4cmを測り、1/3が残る。糸切底である。磨滅はあるがわずかにろくろ痕が認められる。内外面ともに灰白色である。胎土は普通であるが、焼成はあまりよくない。

須恵器杯(32図-8) 口径15cm、底径7cm、高さ4.7cmを測り、1/3が残る。糸切底である。磨滅のためにろくろ痕は認められない。内外面ともに明オリーブ灰色である。胎土は普通であるが、焼成はあまりよくない。

須恵器杯(32図-9) 底径8cmを測り、1/2が残る。糸切底である。外面は灰白色で、内面は浅黄に近い灰白色である。胎土は普通であるが、焼成はあまりよくない。

須恵器杯(32図-10) 底径4.8cmを測り、底部は完存する。糸切底である。磨滅はあるが内面にわずかにろくろ痕が認められる。内外面ともにぶい橙色である。胎土・焼成は良好であるが、還元炎で焼成されていない。

他に同様の底部破片1点がある。

須恵器杯(32図-11) 底径8cmを測る杯高台部が完存する。外面は青灰色で内面は青灰色および灰色である。胎土・焼成は良好である。

須恵器蓋(32図-12) 口縁部を欠くがつまみを中心にした部分が残存する。外面は青灰色、内面は暗青灰色を呈する。胎土・焼成は良好である。

③ 20号住居址

A地区の10グリットにおいて、カマドと判断される石組みの存在から住居址と確定し、主要な出土遺物から平安時代とした。

出土遺物は土師器の甕・杯、須恵器甕・杯、灰釉陶器碗がある。

土師器甕(32図-13) 口径30cmを測る大型の甕で、1/10が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施される。内面は屈折部に横方向のカキ目が残る。内外面ともに橙色である。胎土・焼成はあまりよくなく、表面はザラザラ感がある。

土師器甕(32図-14) 口径18.2cmを測る甕で、1/5が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施される。内面は屈折部に横方向のカキ目が残る。胴部にはヘラ削り痕が部分的に残る。外面は部分的に黒褐色部がある以外は明黄褐色で、内面にはぶい黄褐色である。胎土・焼成は良好であるが、外面は荒れている。

土師器甕(32図-15) 口径18.6cmを測る甕で、1/6が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に指頭圧痕の上に縦方向のカキ目調整が施される。内面は屈折付近に横方向のカキ目が残る、その下部は指頭圧痕が認められ、口唇部は横なでされる。外面は下部に炭化物付着による黒褐色部がある以外は黄褐色である。内面は炭化物付着の黒褐色部以外にはぶい黄褐色である。胎土・焼成は良好であり、他

からの搬入品の可能性が高い。

須恵器甕 (32図-16) 底径8.5cmを測る甕で図化部の1/4が残る。外面は濃緑色の釉薬がかかる部分以外は灰色で、内面はまだらに薄緑の釉薬がかかる以外は灰褐色である。胎土・焼成は良好で、灰軸陶器とも判断できる。

須恵器杯 (32図-17) 口径13cm、底径5cm、高さ4cmを測り、ほぼ完形である。糸切底である。内外面ともにろくろ痕が認められる。内外面ともににぶい褐色と灰白色で底部付近は褐色である。胎土は普通であるが、焼成はあまりよくない。

須恵器杯 (32図-18) 口径11cm、底径5.6cm、高さ4.1cmを測り、1/4が残る。糸切底である。内外面ともに青灰色で、内外に火だすきがある。胎土・焼成は良好であり、他からの搬入品とみられる。

須恵器杯 (32図-19) 底径7cmを測り、1/3が残る。糸切底である。内外面ともにろくろ痕が認められる。外面の上部はにぶい褐色で底部は灰白色である。内面はにぶい褐色である。胎土は良いが焼成はあまり良くない。

須恵器杯 (32図-20) 底径6cmを測る糸切底である。内外面ともに青灰色で、胎土中に白色小石粒を含むが焼成ともに良好である。

須恵器杯 (32図-21) 底径6cmを測るへらおこし底で図化部分は完存する。内外面ともに灰白色で、胎土・焼成ともに極めて良好である。時期的に古い可能性があり、かつ、他地域からの搬入品である。

須恵器杯 (32図-22) 底径6cmを測る杯高台部である。外面は灰褐色で底部は暗黄灰色、内面は浅黄色である。胎土・焼成は良好で他地域からの搬入品とみられる。

須恵器蓋 (32図-23) 上部径15.6cmを測る。外面は明黄褐色および褐色で、内面は浅黄色で、内外ともにろくろ線状痕がある。口縁部を欠失しており全体形不明であるが広口壺などの蓋と考えられる。胎土・焼成は極めて良好で他地域からの搬入品とみられる。

須恵器蓋 (32図-24) つまみのある杯の蓋であるが口縁部を欠失する。内外面ともに青灰色で、内外ともにろくろ痕がある。胎土・焼成は良好である。

灰軸陶器碗 (32図-25) 底径8.4cmを測り、図化部の1/4が残る。外面は高台部際を除く全体に緑灰色の釉薬がかかり、内面は全体に同様の釉薬がかかる。胎土は灰白色である。

④ 22号住居址

A地区の3グリットにおいて、カマドと判断される石組みの存在から住居址と確定し、主要な出土遺物から平安時代とした。

出土遺物は土師器の甕・杯、須恵器甕・杯、灰軸陶器碗がある。

土師器甕 (33図-1) 口径21.2cmを測る甕で、1/10が残る。外面は口縁部下のくびれ部以下に縦方向のカキ目調整が施される。内面は屈折部上に横方向のカキ目残り、それ以下はへら削りされる。外面は明褐色で一部に炭化物が付着する。内面はにぶい褐色である。胎土・焼成は良好である。あまりよくなく、表面はザラザラ感がある。

土師器甕 (33図-2) 底径15cmを測る。木葉痕があり、1/8が残る。外面は底部際が左下がりの斜めのカキ目、その上部は縦方向のカキ目が施される。内面はわずかに輪積み痕がある。外面は部分的に褐色の部分があるが大半は黒褐色で、内面はにぶい褐色である。胎土・焼成は普通である。

土師器甕 (33図-3) 底径8.4cmを測り、1/8が残る。外面は底部際が横方向のカキ目を施し、その上部は横方向のカキ目である。内外面ともに赤褐色である。胎土・焼成は良好である。

土師器甕(33図-4) 底径11cmを測る甕で図化部の1/5が残る。外面は底部際が横方向のカキ目を施し、その上部は横方向のカキ目である。外面はにぶい褐色で、内面は明褐色である。胎土・焼成は良好である。

土師器甕(33図-5) 口径13cm、底径7.5cm、高さ13.5cmの小型甕である。全体の2/3が残存するが、口縁部と底部は直接つながらず、胴部の径や色調などから高さを判断した。底部は糸切底で、外面はろくろ痕が残る。内面は丁寧に磨き仕上げされている。外面は明赤褐色で、内面は黒褐色および赤褐色である。胎土・焼成は良好である。

須恵器甕(33図-6) 底径10cmを測る高台付の底部で、図化部の1/4が残る。内面はろくろ痕が顕著である。内外面ともに暗青灰色で、断面はにぶい赤褐色である。胎土・焼成は良好で硬く焼き締まっている。

須恵器杯(33図-7) 口径13cm、底径6.7cm、高さ4~4.2cmを測り、2/3が残る。糸切底である。外面にわずかにろくろ痕が認められる。内外面ともに明灰白色である。胎土は普通であるが、焼成は良い。

須恵器杯(33図-8) 口径13.4cm、底径5.5cm、高さ4.2cmを測り、3/4が残る。糸切底である。内外面ともに青灰白色で、胎土・焼成は普通である。

灰軸陶器碗(33図-9) 高台径7.4cmを測り、図化部の3/4が残る。外面は灰白色で無軸、内面は中心部が弧線状にその外側は全体に浅黄色の軸葉がかかる。胎土は灰白色である。

灰軸陶器碗(33図-10) 高台径9.6cmを測り、図化部の1/6が残る。外面は無軸で、内面は全体にオリブ色の軸葉がかかる。胎土は灰白色である。

(2) 遺構外遺物

A・B・C各地区から奈良・平安時代の遺物が相当量出土しており、遺構への所屬が明確でないものを本項で扱う。

1) A地区

須恵器杯(33図-11) 4グリット出上の高台がつくものであるが高台部は欠失する。口径は16cmで、口縁部は1/8が残存する。内外面ともに青灰色で、胎土・焼成とも良好である。8世紀段階と考えられる。

須恵器杯(33図-12) 9グリット出上の高台杯で1/3が残存する。口径は13.6cmで、内外面ともに青灰色で、胎土・焼成は良好である。8世紀段階と考えられる。

須恵器壺(33図-13) 6グリット出上で、口径5.8cmを測り、図化部分は完存する。内外面ともに暗青灰色で、断面は赤紫色である。胎土・焼成は良好である。

須恵器杯(33図-14) 6グリット出上で、底径7cmを測り、図化部分の1/2が残存する。底部はヘラおこしで、内外面ともに明青灰色である。胎土・焼成は良好である。

須恵器盤(33図-15) 6グリット出上で、口径16.7cmを測り、図化部分の1/5が残る。薄い作りで、内外ともに灰白色である。胎土・焼成は不良で脆い感がある。

須恵器蓋(33図-16) 6グリット出上で口縁部が1/3残存する。外面はろくろ痕があり、緑灰色である。内面は暗青灰色である。胎土・焼成は普通である。

2) B地区

土師器甕 (33図-17) 3グリット出土で、口径18cmを測る。口縁部が強く外反しする。外部は口唇部に横の、くびれ部以下に縦の非常に細かなカキ目を丁寧に施している。内面は口縁部とくびれ部に横方向のカキ目がある。くびれ部下位の胴部には指頭圧痕がある。内外面ともに灰褐色で、胎土・焼成とも極めて良好である。他のカキ目甕に比べ、胎土・焼成・カキ目の丁寧さなど極めて優れており、他からの搬入品であり、モデル的なものの可能性もある。

土師器甕 (33図-18) 3グリット出土で、口径15cmを測り、1/4が残存する。外面はくびれ部以下に縦方向のカキ目が施される。内面はくびれ部上に横方向のカキ目痕がある。外面はにぶい黄橙色で一部に炭化物が付着する。内面は黄褐色で炭化物の付着が認められる。胎土・焼成は普通である。

土師器甕 (33図-19) 4グリット出土で、底径8cmを測る糸切底である。内面にはろくろ痕がある。外面は橙色で、内面は黒褐色である。胎土・焼成は普通である。22号住居址出土の小型甕と似るがそれよりは大型である。

土師器杯 (33図-20) 4グリット出土で、底径8cmを測る。外面にわずかなろくろ痕がありは橙色で、内面は内黒である。

土師器鉢 (33図-21) 3グリット出土で、口径27cmの大型品である。外面はにぶい橙色で、内面は黄褐色である。胎土・焼成は普通である。胎土などから古墳時代に属する可能性もある。

須恵器蓋 (33図-22) 4グリット出土で、口径14.5cm、高さ3.6cmを測る。内外面ともにろくろ痕が顕著である。内外面ともに灰白色で、胎土は良好であるが焼成はやや軟質である。

土師器甕 (33図-23) 5グリット出土で、口径11.6cmを測り、1/5が残存する。外面はくびれ部以下にろくろ横線がある。外面は橙色で一部に炭化物が付着する。内面はにぶい橙色で炭化物の付着が認められる。胎土・焼成は良好である。

土師器碗 (33図-24) 6グリット出土で、口径15cm、底径8cm、高さ4.8cmを測り、高台内側に糸切痕がある。外面にわずかなろくろ痕が残り、橙色である。内面は褐色である。胎土・焼成は良好である。

土師器皿 (33図-25) 6グリット出土で、高台径7cmを測り、底部の2/3が残る。外面は黒褐色で、内面は内黒である。胎土・焼成は良好である。

須恵器杯 (33図-26) 8グリット出土で、口径12.8cm、底径4.6cm、高さ4.6cmを測り、1/3が残存する。底部は糸切で、内外面にろくろ痕がある。内外面ともに灰色である。胎土・焼成は良好である。

3) C～F地区

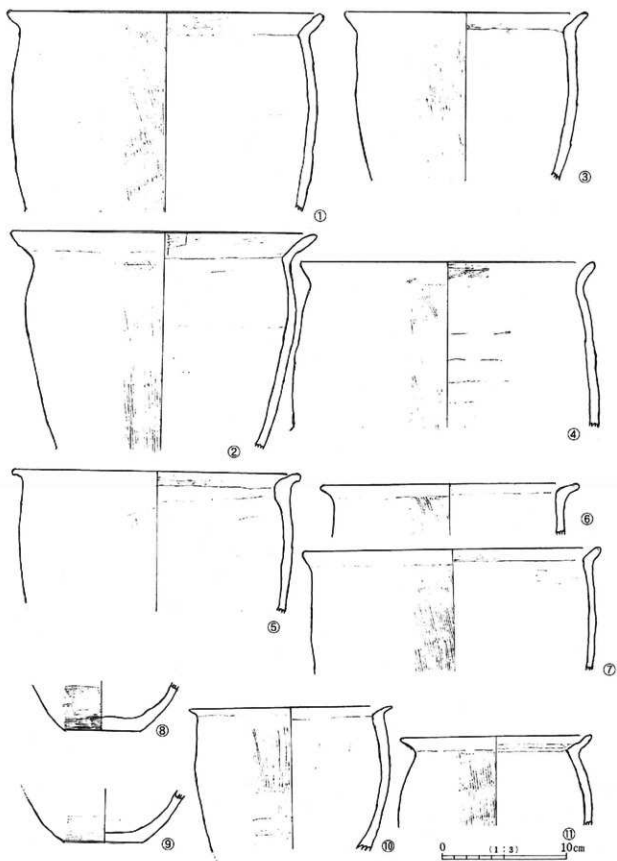
須恵器杯 (33図-27) C～F地区の西南隅からの出土で、口径13cm、底径6cm、高さ4.5cmを測り、2/3が残る。内外ともに灰白色である。胎土・焼成ともあまり良くなく、ざらざらした感じである。

以上、遺構外出土遺物として、特徴的と思われるものについて図示したが、A・B・Cいずれの地区において当該期の土師器・須恵器が相当量出土しており、調査範囲外に連続して、さらには周辺一帯に広く住居址などの遺構が存在する可能性が高く、当地域を代表する大規模集落が展開されたと推測される。

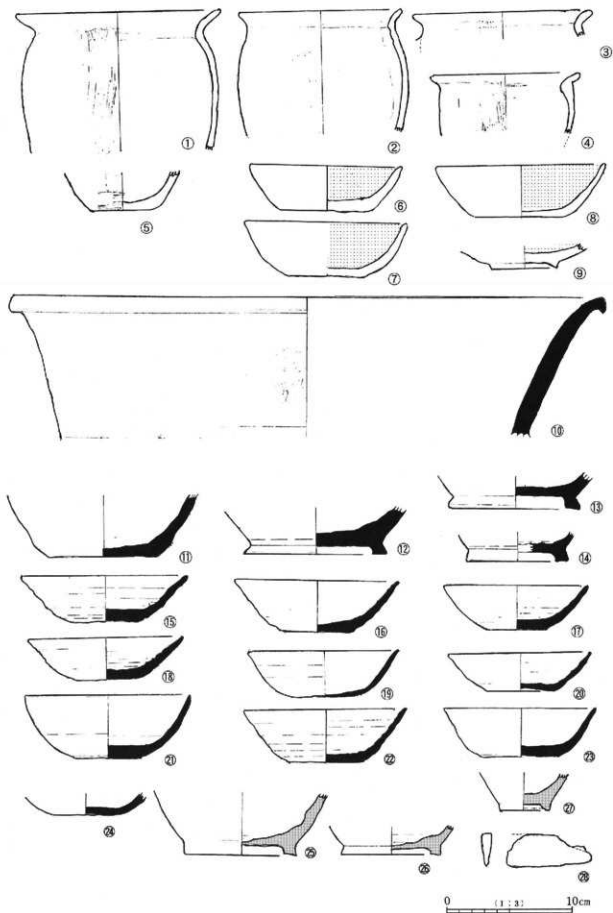
5 時期不詳

◎ ビット列

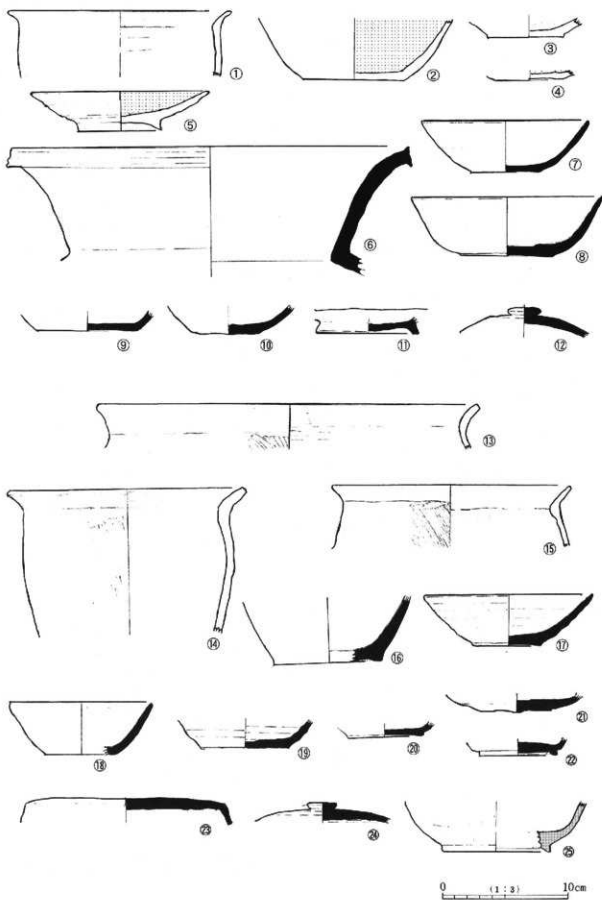
A地区とB地区の交差する一帯の黄砂土上面で、5個のビットが直線状に検出されている。個々のビットは、径40～60cmほどで、検出面からの深さは20cm程度である。メモ記録には、遺物が出土したとの記録はなく、時期、性格を決めることはできない。



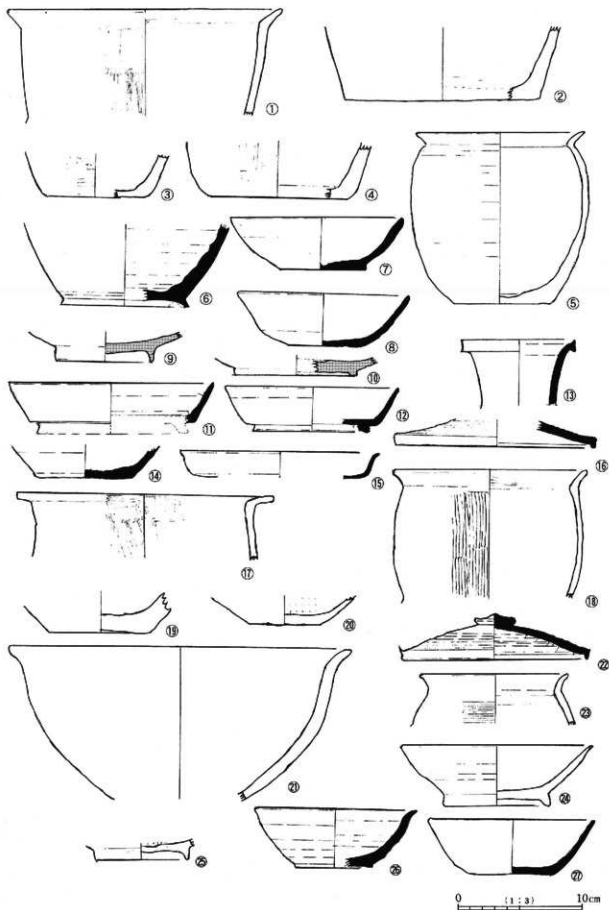
第30图 16号住居址出土遗物(1)



第31图 16号住居址出土遗物(2)



第32図 18号住居址 (1~12) 20号住居址 (13~25) 出土遺物



第33图 22号住居址 (1~10) 遺構外 (11~27) 出土遺物

V ま と め

1 弥生時代中期前半の出土土器・石器について

(1) 土器

出土した弥生土器には、わずかに中期後半から後期末の土器もあるが、大半が阿島式土器とされてきた十器群に位置付けられるものである。第1図に示したように、本報告の調査地点は過去に阿島式土器と型式設定された土器群の出土地に囲まれている。また、前回の22年度調査地点から出土した弥生土器の大半も阿島式土器に位置づけられてきた十器群であり、一帯が阿島式土器期の人々にとって、生活域として盛んに利用・活用された地である。

さて、本報告の調査地点から出土した土器群と阿島式土器について考えてみたい。

阿島式土器は、昭和13年に大沢和夫氏によって仮称的に「阿島式」として報告されたことに始まる。(大沢1938) さらに、周辺から出土した十器群も含めて阿島式土器が提唱されていった。(1950戸沢、1950大沢) その結果、阿島式土器は、甕形の小型壺形土器や双口土器を中心とした土器型式と認識されることが多々あったが、変形土器が組成することを含めて阿島式土器と括られた。(藤森1955)

昭和35・36年に阿島五反田遺跡の学術調査が行われ、完形土器を含む多くの資料が得られた。その結果から、阿島式土器の型式内容について、

- *大型壺形土器、小型壺形土器、双口土器、鉢形土器、各種土製品を含むセットであること。
- *壺形土器は、只田町式ないしは瓜罎式を混在し、約半数に朱彩を施し、太い沈線文と連続押引爪形文が発達して、細長頸と急に張る胴部とくぼみ底で小さくまとまる底部になること。
- *小型壺形土器は、甕形で乳状突起をつけること。
- *鉢形土器は、水神平式の残照、条痕文系の要素を含みながら櫛描の条線文が主流になること。

そして、地方色豊かなユニークな土器セットとして把握されるものであるとまとめられた。(佐藤・宮澤1967)。

また、阿島式土器は中部高地独自の文化生成の表象ととらえられ、細長頸の壺形土器は、口縁から胴上半にかけて指頭による押捺・棒による太い沈線文や連続押引爪形文・櫛状器具による条痕文帯・縄文などを組み合わせて飾り、中には丹彩されるものもあって、胴下半は条線が付けられること、鉢形土器は、口端や口縁をわずかにふくらませて刻み目や押捺を加え、器面を櫛で縦走、斜走、羽状に施文すること、小型土器・双口土器・甕形土器が作られること、瓜罎式土器が混在すること、を特徴として広く紹介された。(神村1966)

この後、断片的に阿島式土器の出土が報告されたりしたが、まとまった出土例はなく、前述の内容の土器型式が、阿島式土器ととらえられてきた中で、昭和35・36年調査資料等の再観察を通して、阿島式土器は、壺(長頸壺・甕形壺・双口壺)と鉢で組成され、鉢は口縁部のつくりから、口縁端部が鈎状に垂れ下がるもの・それほど垂れ下らないもの・口縁が澹状になるものに分けられ、嶺田式土器とは顔縁関係が強く、瓜罎式土器と交流がある土器群で、松本平や善光寺平の土器群とは様相を異にしていることから、伊那谷を中心に分布する土器型式であるとした。(市澤1996)

平成9年、飯田市川路井戸下遺跡の発掘調査が行われた。住居址2軒とともに阿島式土器がまと

まって出土し、阿島式土器についての分類・分析がなされた。壺形土器は、a：太沈線文・沈線文・刺突文・連続爪形文・縄文・条線文が施文される細頸壺類で、赤色塗彩されるものとされないものがある、b：櫛状工具・ヘラ状工具を多用して、胎土・焼成・色調がaと異なっていて瓜瓠式に類似している、c：受け口状口縁の太頸壺の三つに分類された。甕形土器は、口縁部形態・文様・条痕調整などでバラエティーに富んでいるとして、分類してはならない特徴的な甕の説明がされた。壺・甕以外には、小型の鉢、甕形壺、人面付き土器が出土した。そして、出土土器群について、櫛状工具による条線文が本格使用されているとの認識から、井戸下遺跡出土の土器群は、阿島式土器の新しい段階に位置し、後続の北原式土器に結びつく資料と考えられた。(下平2001)

こうした阿島式土器についての先行研究を整理すると、壺形土器の主体は長頸壺で、これに太頸壺・甕形壺・双口上器・小型の壺が加わる。長頸壺は、太沈線文・沈線文・刺突文・爪形文・縄文・条線文などを組み合わせて施文し、赤彩されるものとされないものがある。甕形土器は、口縁部の形状や施文状況にバラエティーがあるものの、胴部には条痕文が施文される。そして、瓜瓠式土器が混在する土器型式であると考えられてきたといえよう。

次に、本報告の土器群についてまとめ、これまでとらえられてきた阿島式土器と重ね合わせてみたい。

壺について：長頸壺が主であり、この他に、壺(8図)、受け口壺(7図12)、広口壺(11図1)、太頸壺(12図13)、細頸壺(12図14)、甕形壺(13図1)、小型壺がある。壺と受け口壺は、条痕文を基調とする土器で、太頸壺と細頸壺は、櫛状文を主とし胎土や色調などから瓜瓠式土器につながる土器といえる。甕形壺と小型壺には、赤彩されたものとされないものがある。

さて、主となる長頸壺で、赤彩されないものは、太沈線文・沈線文・縄文が胴上半の施文の主要要素となっていて、これに刺突文が加わっているといった状況にある。また、凸帯が貼付されているものもある。文様のモチーフは、破片のため全体を把握しきれないが、重三角文を連続させる(9図10)、連弧文(9図36)、重円文(10図9)、重四角文(10図19・20)などが見られる。一方、赤彩されたものも太沈線文・沈線文・縄文が胴上半施文の主要要素となっているが、連続爪形文・連続押引爪形文が顕著に見られる。文様モチーフは、連弧文を紡錘形に連結させる(11図31)ものが目につく。赤彩される、されないで施文状況に違いがあることが伺われる。また、上器内面の色調でも、赤彩されないものは赤褐色・黄褐色・黒灰色・灰色・黒色などがみられ、赤彩されたものは黒灰色・灰色などであった。内面色調の違いが土器製作地に関わっているかもしれないと考え、胎土の観察をルーペで行ってみたが、現状、違いを見出すまでには観察しきれていない。胴下半に条痕文が施されることは、両者に共通している。

甕について：胴部には、櫛状器具等による条痕文や短線文がみられる。条痕文では、密でほぼ均一に施文されるもの、粗で深さなどが不均一で条線文的なもの、条痕文を縦に施すものなどがある。密なものの中で、器厚・色調がやや異なり、器形も頸部が長く胴下半が削られる15図7・20は、古手の要素とみられる。胴部施文状況は違うが、それぞれの口縁部は外反させて口縁端部を面取りし、刻目を施していることが基本となっている。面取り面に押引文や内面に施文したりするものも多くはないが存在している。また、口縁端部が鈎状になるものも見受けられる。こうした特徴は、従来から把握されてきた内容と同様である。また、本報告の甕形土器の全体的な特徴として、胎土に1mm前後で白色・黒色・透明の小石粒や雲母粒が入っていて、内外面の断面の表層をみると赤褐色の層が見られ、よく

焼き締まっていて、内面はややざらついた感じをしていることが上げられる。

報告土器群と阿島式土器について：本報告の土器群は、これまでとらえられてきた阿島式土器の型式内容と、大筋では一致しているところである。

そうした中で、これまででは、長頸壺を赤彩する場合としない場合があると考えられてきた。これは、長頸壺は同系統のものと考えられた結果である。しかし、本報告資料でみると両者には、文様やモチーフ、内面色調などに違いがあることが指摘でき、同系統とするより別系統と考えていくべきと考えられる。

また、条痕文を基調とする一群は、従来阿島式土器には含まれていない要素である。住居址が検出されている井戸下遺跡の報告書記載の資料には、1点の受け口の太頸歌があるが、遺構川土ではなく不明な点が多いとされている。一方、中央構造線上の遠山谷にある尾の島館遺跡では、昭和60年の発掘調査で榎正式・水神平式・岩滑式土器といった条痕文基調の土器群と混在して、阿島式土器類似の長頸壺や口縁端部に刻目の施された甕形土器が少量出土している。(南信濃村教委1986) また、昭和44年の発掘調査では、住居址に伴って条痕文、沈線と縄文が施文された壺形土器、頸部が長く横位や縦羽状の条痕文が施文された甕形土器、赤彩の広口壺の完形品が出土している。(伴1974) 井戸下資料と尾の島館資料で変遷を考えてみると、条痕文基調の土器群の状況から尾の島館資料から井戸下資料への変遷が考えられる。本報告資料を狭い範囲のトレンチ調査出土という一括性を把握すると、尾の島館資料と井戸下資料の中間的要素を持つ資料といえよう。

一方、阿島式土器の前型式として設定されている土器型式に寺所式土器がある(佐藤1982)。小規模な試掘調査や緊急発掘での資料をもとに設定され、長頸壺と甕形土器、器形が今ひとつはっきりしない押し凸帯を付けた土器群、東海地方の櫛描文土器がある。長頸壺は、太沈線文・沈線文・縄文が主に施文され刺突文も目につくが、連続押し凸帯、バナナ状区画文がないことや凸帯を巡らすこと等から、甕形土器においては口縁端部の押し凸・刻みが深く、横位・斜位・縦位・羽状に施文される条痕文も深く、短線文が見られない等から阿島式土器の前駆をなすと考えられた。寺所式土器の内容は、これまでとらえられてきた阿島式土器の型式内容とは異なっており、阿島式土器の前駆をなすということは、尾の島館資料期に近づくことになるが、条痕文基調の土器群の存在が見あたらないことが謎である。

まとめ：長々述べてきたが、本報告資料と阿島式土器についてまとめたい。結論的にいえば、問題は多々あるが、狭い範囲のトレンチ調査で出土した本報告資料を一括して狭義の阿島式土器として位置づけたい。すなわち、条痕文を基調とする壺類、太沈線文・沈線文・縄文が主に施文される赤彩されない長頸壺、同様の施文ではあるが赤彩される長頸壺、櫛描文・ヘラ描文の太頸壺や細頸壺、赤彩もしくはされない壺蓋・小型壺と、条痕文・条線文・短線文・無文の甕・鉢形土器で組成される土器型式とのとらえである。これまでのとらえられてきた型式内容に、条痕文を基調とする土器群が一定程度組成すること、赤彩される土器とされない土器を別系統として把握していくことが加わることになる。条痕文を基調とする土器群を加えて考えることで、条痕文系土器群の消長と阿島式土器との関係を明らかにできると考えるからである。また、阿島式土器のメルクマークのひとつとされてきた赤彩された土器は、遠江・三河・尾張でも出土する土器であり、出白や広がりをもたせることで弥生時代中期前半の地域間関係の解明にせまれると考えたからである。

一方、前記した狭義の阿島式土器は、一括性等から考えて根無し草である。そこで、阿島式土器の

前拡張として尾の島館資料や寺所式土器、後拡張として井戸下資料を含む広義の阿島式土器を概念的に設定すれば、当地方の弥生文化の波及・定着に際して、他地域からの関与はどのようであったか、内在的にはどのような変化、発展をさせてきたのかを明らかにしていく上で有効ではないかと考える。

阿島式土器は、早くに提唱されたものの、まとまった資料の出土に恵まれなかったため、検証的に研究が推し進められなかった土器型式といえよう。上記の阿島式土器の括り方をひとつの基準にして今後研究していったらどうかと思っている。

(2) 石器

前述したように、石器のみで時期決定は難しいが、本報告の石器資料は、土器の出土状況から大半は狭義の阿島式土器期のものと考えた。ただし、挟入打製石包丁は後期になって出現すると研究成果（桜井1986、山下2005）から外して考える。問題になるのは、横刃型石包丁と有肩扇状形石器である。横刃型石包丁は中期後半を中心に、有肩扇状形石器は後期まで継続して使用される定形的な石器で、石製農具を主要生産具として営まれる当地方の弥生文化の特質を象徴する代表的な石器である。

本報告の横刃型石包丁と有肩扇状形石器は、定形化していて、阿島式土器期まで遡るのかと思えた。昭和35・36年発掘調査報告では、大型打製石斧とともに、鎌形打石器名の横刃型石包丁、有肩扇状形石器が阿島式土器期の石器として取り上げられている。しかし、挟入打製石包丁的な石器も含まれていることから、一括性について疑問も持った。そこで、類例を見てみた。井戸下遺跡の阿島式土器期の住居址2軒から両者の石器が出土している。一括性ではやや疑問もあるが、寺所遺跡出土土器でも寺所式土器に伴うとして両者が報告されている。また、有茎五角形系の石鏃も1点出土が報告されている。尾の島館資料の中には、定型化には今一步の横刃型石包丁がみられる。

類例は少ないが、横刃型石包丁と有肩扇状形石器の出現は狭義の阿島式土器期、さらには前駆と考えられている寺所式土器期まで遡る可能性がある。すなわち、弥生時代後期まで使用される（一部古墳時代まで継続）定形化した石製農具である耕起具の大型打製石斧、収穫具の横刃型石包丁・有肩扇状形石器は中期の前半段階にすでに揃うといえる。

一方、土器の変遷をみると、阿島式土器の後に位置づけられている北原式土器は、櫛描文を主として施文され、甕形土器の一部にはつながりが伺えるが、全体的には不連続な土器型式である。また、阿島式土器に見られた東海地方とのつながりが見られなくなり、逆に、粟林式土器類似の土器、椋田・松原遺跡産とできる太形蛤刃石斧、扁片刃石斧や磨製石鏃が見られるようになる。このことは、ヒト・モノ・情報の動きが大きく変化したことを意味している。そうした中で、北原式土器期の石器には、前述した大型打製石斧、横刃型石包丁、有肩扇状形石器が安定的に組成しており、前文化の連続性は完全に失われていない。

(3) 阿島式土器期について

阿島式土器は、地方色豊かなユニークな土器セットで、中部高地独自の弥生文化生成の表象と捉えられてきたが、住居址を始め集落址の発見例は非常に少なく、断片的な遺物が検出される程度だったため、独自の弥生文化の内容に踏みこめずにいた。発見例の僅少は、現状でも変わらないことから、阿島式土器期の人々の生活痕跡は多くないのであろう。しかし、現状開発行為があまり及んでいない地に、阿島式土器期の人々の生活痕跡が埋もれている可能性が高いと思われる。たとえば、飯田市川

路の天竜川治水対策事業にかかわる発掘調査では、前述の井戸下遺跡をはじめ、天竜川洪水氾濫原に接する遺跡からわずかではあるが該期の遺構・遺物が発見されている（飯田市教委 2003）。このことは、阿島式土器期の遺跡が、天竜川洪水氾濫原を意識した水辺に立地している可能性の高いことを示し、阿島式土器期の人々が、水田稲作へ傾倒していたことを意味しているといえよう。そして阿島式土器は、弥生文化を東海地方から段階的に波及させてきた条痕文土器の最終段階（市澤1991）の土器群である。

一方、最近、当地方の縄文時代晩期最終末の土器群に、アワ・キビの種子圧痕が多数付着していることが明らかにされ、雑穀栽培の存在が指摘されている（遠藤・高瀬2011、遠藤2012）。これらの土器群には、条痕文土器を伴っている。条痕文土器は、水田稲作の存在を知った人々によって生み出されたこととされ、条痕文土器の広がりとは、水田稲作の広がりを示していると考えられている。ということは、当地では雑穀栽培が行われている状況下に、水田稲作が波及してきたと考えられる。条痕文土器初期の遺跡は、段丘上に点々と立地しており、阿島式土器期のように水辺への強い志向性は感じられない。大型打製石斧などの農具を使って雑穀栽培などの生業活動を行っていた、「さまよう弥生人」との表現が当てはまると考えた（市澤2012）。それが、条痕文土器最終段階の阿島式土器期には、水辺志向の遺跡立地になっており、水田稲作が主生業化したと考えられる。そして、雑穀栽培などを通して発達させてきた石製農具が、定型化した横刃型石包丁や有肩扇状形石器として結実したのではないだろうか。阿島式土器期は、条痕文土器群が育んできた水田稲作技術が総仕上げされた時期と考ええる。

しかし、次への展開は、石器の項で述べたように不連続の変化である。それは、単に当地方のみの変化ではなく、もっと大きなエリアでの変化であったと考えられる。土器にみられていた東海地方とのつながりが無くなること、北信方面とのつながりが生じたことがそのことを物語っている。一方、遺跡立地も、阿島式土器期の遺跡が継続することはほとんどなく、阿島式土器期の痕跡がない新たな地に立地してくる事実からも大きな変化があったことが伺える。とはいえ、阿島式土器期までに結実させてきた横刃型石包丁、有肩扇状形石器、伝統的な大型打製石斧といった石製農具が捨て去られることはなかった。それは、当地方の風土に適した生業活動の必需品であったということであり、そこに、風土を活かした生活を営もうとした弥生人を感じる。

- 大沢和夫 1938 「信濃阿島出土の弥生式土器」『考古学』9-10
戸沢充則 1950 「所謂阿島式土器の新資料」『古代学研究』第3号
大沢和夫 1950 「特殊な弥生式土器」『信濃』2-7
藤森栄一 1955 「中部高地・北陸」『日本考古学講座4』河出書房
佐藤麿信・宮澤恒之 1967 「喬木村阿島遺跡」『長野県考古学会誌』4号
神村 透 1966 「中部高地」『日本の考古学 弥生時代』河出書房新社
伴 信夫 1974 「長野県下伊那郡南信濃村尾ノ島館遺跡発掘調査報告」『長野県考古学会誌』17号
佐藤麿信 1982 「寺所遺跡と寺所式土器」『中部高地の考古学II』
桜井弘人 1986 「石製農具について」『恒川遺跡群 遺物編』飯田市教育委員会
南信濃村教育委員会 1986 『尾ノ島館遺跡発掘調査報告書』『同 関連調査報告・考察編』
市澤英利 1991 「下伊那の弥生土器」『下伊那史 第一巻』

- 市澤英利 1996 「阿島式土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 下平博之 2001 「弥生時代中期土器群の様相」『井戸下遺跡』飯田市教育委員会
- 飯田市教育委員会 2003 『久保田遺跡 久保田1号古墳 藤原土塚古墳』
- 同 2003 『殿村遺跡 大荒神の塚古墳』
- 山下誠一 2005 「飯田盆地における弥生時代の石器」『飯田市美術博物館 研究紀要』15号
- 遠藤英子・高瀬克範 2011 「伊那盆地における縄文時代晩期の雑穀」『考古学研究』230号
- 遠藤英子 2012 「縄文晩期末の上器棺に残された雑穀」『長野県考古学会誌』140号
- 市澤英利 2012 「弥生人の営みと伊那谷の風土」『伊那』平成24年7月号

2 古墳時代の遺構・遺物から

古墳時代の遺構として把握されたのは19・23号住居址であるが、調査がトレンチによる限定されたものであり、それ以外にも複数の住居址などの存在した可能性が高い。確認された2件の住居址を基本に、本遺跡における古墳時代について若干の考察を行いたい。

2件の住居址は19号住居址が5世紀後半、23号住居址が6世紀後半と約100年の時間差がある。その前後・中間期の状況を整理すると次のようである。

古墳時代前期においては、小型器台（13図-20）の出土から弥生時代末の延長上にあたる4世紀代において近在での人々の営みのあったことを示している。

続いて小破片ではあるが、有段口縁帯が出土しており、4世紀末もしくは5世紀前半期においても、居住エリアの周辺の状況があったと考えられる。

5世紀後半、19号住居址の存在から、居住エリアに特定でき、生活の中心地であったと位置付けることができる。がこの地で再開されたことを示している。19号住居址は、5世紀のうちでも終末期段階と判断されるが、遺構に属さない遺物ではあるが、他地域からの搬入品である須恵器が出土しており、5世紀後半期に集落の形成された可能性が高い。

次に、23号住居址の時代であるが、甕底部と坏2点のみの出土ではあるが、6世紀後半期と判断される。この期の遺物として遺構外ではあるが比較的多くの遺物が出土しており、中でもBトレンチにおいては器形判断のできるものが複数あり、調査段階でも遺構として把握していた箇所があり、この段階の住居が存在した可能性が高い。

今回の調査においては、ごく限定された調査範囲であり、住居址等特定できた遺構は少ないが、通常、当地域における当該期の集落は複数の家で構成され、現地の地形的条件からしても相当規模の集落が形成されていたと推測される。当該地においてもトレンチ部以外の詳細な調査が今後実施されるとすれば、当地域全体を見ても注目される集落が確認される可能性が極めて高い。

本遺跡の古墳時代における意味について若干触れると、天竜川左岸における5・6世紀の集落は調査事例の実態も反映して、伊久間原等の高位段丘面上の遺跡が中心的に把握されてきた。しかし、居住地決定にあたっては、主要な生業である水田による稲作地の安定確保が古墳時代にあっても重要な要素であり、天竜川氾濫原に直近した本遺跡が天竜川左岸の中核を担っていた可能性が極めて高いといえる。

当該地域の古墳時代の特徴は、馬生産によって象徴され、天竜川右岸地区の飯田市域に県内屈指の飯田古墳群が構成され、当時の中央である畿内政権との深い繋がりのおかげで全国的な注目度が高まっている。そうした飯田古墳群の北域にあたる飯田市座光寺地区と一衣帯水にある本道跡は座光寺地区の古墳群築造に大きくかかわったはずであり、その意味からしても天竜川東岸の中核的な集落として、周辺の高位段丘上の集落なども統括していたことを想起させる。そ延長上に、天竜川左岸唯一の前方後円墳である郭1号古墳の築造に繋がり、その中核として機能した集落としても位置付くといえる。

3 奈良・平安時代

1) 奈良時代

奈良時代の遺構は今回調査では確認されていないが、調査範囲内全体から断片的ではあるが、8世紀代の遺物が散見する。それは、6世紀後半の古墳時代後期の後、終末期にあたる7世紀代の遺物は確認されておらず、およそ1世紀を隔てた奈良時代にいたって、再び人々の生活の地としてこの地が活用される姿の一端を示している。

奈良時代と判断した資料は、20号住居址出土遺物の須恵器32図-21・22や遺構外出土の33図11-16の須恵器群が8世紀代に属するものと判断され、住居址等の遺構が存在した可能性がある。

この時代、天竜川対岸の座光寺恒川遺跡に伊那郡衙が設置・運営された時代であり、天竜川を挟むとはいえ、直近にあり強いかかわりのあったことは想像に難くない。

2) 平安時代

続く、平安時代の状況はAトレンチ内に連続して住居址が存在し、Bトレンチにおいても相当量の遺物が出土し住居址の存在した可能性が高く、今回調査地点全体が当該期においてかなり密集し、かつ、連続的に人々の生活した土地として位置付いていたことを示している。

確認した住居址は、出土遺物から見て9世紀中ごろから後半にかけてのものであり、土師器甕・坏と須恵器甕・坏を主体にわずかに灰釉陶器を含み、一般的な家での什器構成といえる。

しかし、16号住居址については基本的な構成は他の住居址と共通するものの、出土量の多さは圧倒的である。特に、土師器甕・須恵器坏は通常の家一軒が保有する数を凌駕している。そのうち、甕類については大型甕が5点以上、小型甕が8点以上を数え、日常での必要数を超える数といえ、土器の生産・需給に関連したような特別な役割を有した家であった可能性が高い。

当該期の什器類は在産地の土師器と外来の須恵器・灰釉陶器とで構成され、本集落においても同様であるが、搬入土器類について若干の状況を整理してみる。

集落内で製作された土器類としては、土師器甕・坏・皿などがある一方、須恵器・灰釉陶器に加え、土師器甕の中でも胎土・焼成・調整痕跡など良品と見做されるものがあり、これも他からの搬入品と判断される。

須恵器については、近在で窯跡の確認された事例がなく、当該期の窯が存在するのは天竜川左岸では龍江御殿山窯跡、右岸側で竜丘宮洞窯跡であり、対岸の座光寺地区にも須恵器窯の存在可能性があり、以上いずれかの窯で生産されたものが本集落にもたらされたといえる。胎土・焼成などから極め

て良品もあり、わずかではあるが当地域以外からの搬入品があるが、大半は前記の当地域内の窯で生産されたものである。坏類については、硬質で青灰色系のいわゆる須恵器、軟質で灰色系の粗雑なもの、比較的硬質ではあるが褐色系の酸化炭焼成のものがある。それらから窯元の数には3箇以上と考えられる。また、それらが混在した状況は、消費地である本集落内の人々が日常生活において必要な什器類の確保に努めはするもののその品質自体にそれほどの頓着がなかったと考えられる。

灰釉陶器は、すべて当地域外から搬入されたものであることはいままでの間でもないが、供給元は、猿投産と東濃産がある。土器類全体での量は極めて限定的であるが、壺類が若干多い傾向が見受けられ、新しい焼き物としての感覚の中で当集落内での使用があった可能性がある。

土師器塚については、基本的に集落内で生産されていると考えられるが16号住居址30図-6、20号住居址32図-15の2点が胎土は精緻であり、指頭による壁面調整がしっかり行われ、カキ目調整も丁寧に施されるなど、他の壺の状況と異なりを見せている。いずれの地域からもたらされたのかは類例についての比較検討がなされておらず、今後の課題である。いずれにしても、本集落内で製作されたと判断される壺についても、基本的な製作技法等は共通しており、それらの搬入品をモデルとしている可能性が高いと考えられる。

古墳時代において天竜川対岸の座光寺地区との深いかかわりの中で集落展開された状況は続く奈良・平安時代にあっても同様であったと考えられる。奈良時代の座光寺には伊那郡衙が置かれ、郡の中心であっただけでなく、東山道に関わる馬生産・管理の拠点として、東国と畿内を結ぶ要衝として大和朝廷の施策展開に重要な役割を果たしていた。

その対岸にあたる本遺跡は伊那郡衙とは大河天竜を挟むとはいえ指呼の間にあり、伊那郡衙を支え続けた集落が展開されたと考えられる。

奈良時代の状況としては、わずかに須恵器の出土が認められる程度であるが、当地域全体の傾向として奈良時代そのものの遺跡確認例自体が少なく、当該期遺物の出土した遺跡の多くが律令制度の展開の中で何らかの役割を担っていたと考えられる。調査箇所近任にかなりの規模の集落など遺構の存在が想定される。

平安時代に至り、複数の住居址による集落が展開する。調査範囲が限定されていたにもかかわらず複数の住居址が確認され、また、調査範囲内だけでも確定できなかったが遺物出土状況などからさらに多くの住居址が存在したと思われる、9世紀代全体では10の単位にとどまらない竪穴住居址などで構成された大集落であった可能性が高い。

律令期における本遺跡の位置は、信濃国伊那郡伴野の郷にあたるが、伴野の郷の本質地を支えた集落であった。本質地すなわち郷庁所在地の特定がなされていない現実の中、想定される位置は地名に残る隣村豊丘村神籾伴野地籍、あるいは、古墳時代後期に天竜川左岸唯一の前方後円墳の築造をなした本村阿島地籍のいずれかと想定される。いずれの地を選定したとしても本遺跡の位置は両者の中間にあたり、その位置からして、郷の運営を支え、あるいはその一端を担っていた集落と考えられる。なお、阿島地籍とは加々須川を挟み直近の位置あり、地形的な状況も勘案すると、郷庁の機能面においても一定の役割を本遺跡の中に求めた可能性すら予測させる。

今次調査が部分的なトレンチ調査に限定されたもので、遺跡の実態のごく一部分を垣間見た程度のものであるが、その中で確認できた事実から類推すると、本遺跡が当地域すなわち伊那郡における律令制度の展開にあたって重要な役割を果たしていたといえる。

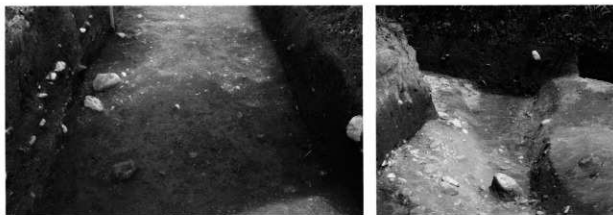
写 真 图 版



遺跡の遠望（南東から）



遺跡の近景（西から）



溝状遺構 2 検出状況（左：東から）と掘り下げ（右：南から）



溝状遺構 3 完掘状況（南東から）



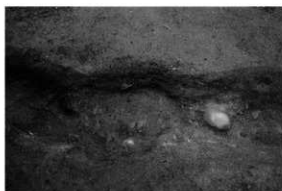
溝状遺構 3 ピット群（北西から）



溝状遺構 3 壁下遺物出土状況（北東から）



溝状遺構 1 (右) と 4 (左) (南東から)



溝状遺構 4 と遺物出土状況



赤彩小型壺出土状況



溝状遺構 1 上層の土器出土状況



19号カマドか (北から)



16号カマド (西から)



20号カマド (南東から)



22号カマド（東から）



時期不詳 ビット列



A地区発掘調査風景



弥生土器：条痕文を基調とする壺類



弥生土器：赤彩される壺類



弥生土器：沈線文・縄文・刺突文を主とする壺類



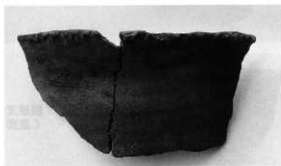
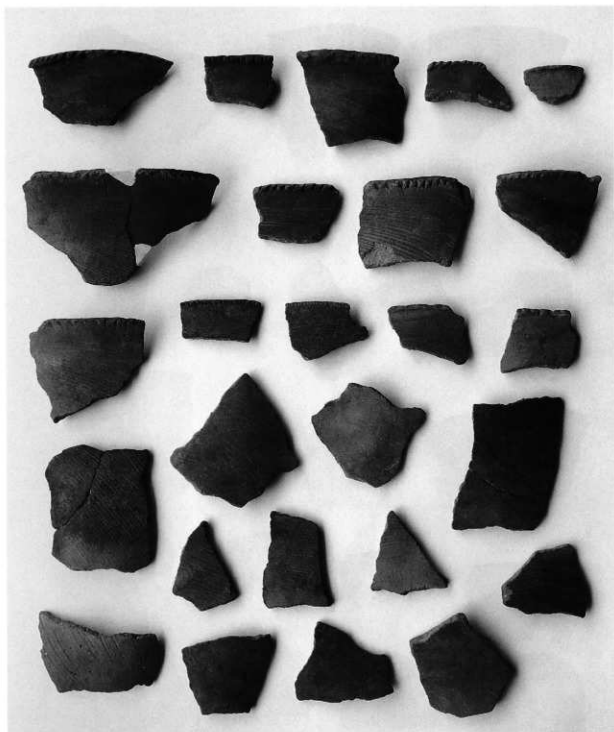
弥生土器：櫛歯文を主とする壺類



弥生土器：一部器形がわかる壺類と小型壺類



弥生土器：条痕文の幅・深さがほぼ均一の壺類



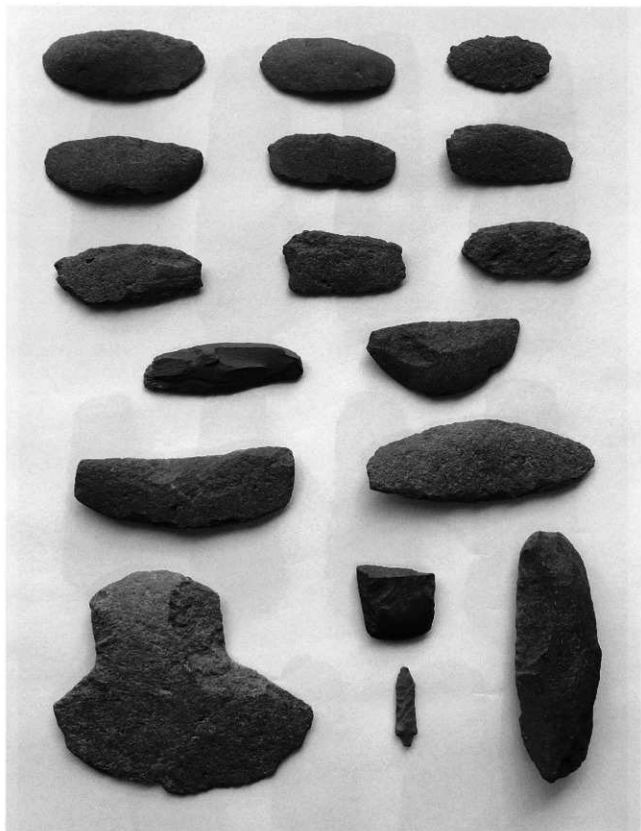
弥生土器：条痕文の幅・深さが不均一傾向の壺類



弥生土器：短線文、条痕文が縦施文、無文の壺類と布目・木葉・網代痕のつく底部



弥生石器：耕起具



弥生石器：収獲具・工具・狩猟具

報 告 書 抄 録

ふりがな	あじまごたんだいせき II							
書名	阿島五反山遺跡 II							
副書名	五反田地区村道開設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	市澤英利 小林正春 松島信幸 (今村善興)							
編集機関	喬木村教育委員会							
所在地	〒395-1107 長野県下伊那郡喬木村6664 TEL 0265-33-2001							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
あじまごたんだいせき 阿島五反山遺跡	しらいぬぐん 下伊那郡 たかぎのむら 喬木村阿島 550-1	2654	4996			平成23年 5月23日～ 8月5日	94	村道開設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
阿島五反山遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代	溝状遺構 住居址 住居址	中期前半の土器・石器 土師器・須恵器 土師器・須恵器		阿島式土器期の土器・石器 古墳時代から古代にかけての集落		

阿島五反田遺跡Ⅱ

2013年3月 発行

編集・発行 長野県下伊那郡喬木村6664
長野県下伊那郡喬木村教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社

